

## 山梨県森林総合研究所創立 90 周年記念

- I. 山梨県森林総合研究所 90 年の歩み
- II. 平成 27(2015)年度以降の山梨県森林総合研究所  
研究報告掲載論文の要旨
- III. 平成 27(2015)年度以降の学会等への発表題名一覧

## I. 山梨県森林総合研究所 90 年の歩み

年 時	内 容
昭和10年(1935) 10月1日	山梨県林業試験場設置(山梨県令第42号 昭和10年9月30日)。造林部、治水及林産物製造部、木工部、庶務部の4部制(山梨県訓令乙第230号 昭和10年10月1日)
昭和11年(1936) 2月20日	南都留郡福地村(現富士吉田市上吉田)に庁舎竣工
昭和19年(1944) 10月25日	「林業試験場報告(現「山梨県森林総合研究所研究報告」)第一號」刊行
昭和36年(1961) 4月1日	県営富沢林木育種場設置
昭和37年(1962) 3月31日	「山梨県林業試験場報告第10号」刊行
昭和38年(1963) 3月31日	「森林立地解析図」刊行
昭和40年(1965) 10月1日	創立30周年記念式典開催、試験場一般公開および「山梨県林業試験場30年誌」刊行
昭和43年(1968) 4月1日	林業指導所を合併し、甲府市飯田町(飯田五丁目)に移転。併せて富士吉田市上吉田に林業試験場富士分場(現富士吉田試験園)および南巨摩郡富沢町福士に林業試験場峡南分場(富沢林木育種場併設)を設置
昭和43年(1968) 4月	富士山県営有料道路(富士スバルライン)沿線緑化に関する調査・試験を開始し、永久調査区を設定
昭和44年(1969) 3月1日	「山梨県の林業地図」刊行
昭和45年(1970) 8月20日	甲府市岩窪町に林業試験場本場庁舎完成
昭和45年(1970) 11月20日	甲府市岩窪町に木材関係機械工作室及び乾燥室完成
昭和45年(1970) 12月	新庁舎での業務開始
昭和46年(1971) 3月31日	「森林立地解析図(改訂版)」刊行
昭和48年(1973) 3月	「山梨県民有林適地適木調査説明書」刊行開始(昭和54年3月まで合計15冊)
昭和48年(1973) 4月1日	全国林業試験研究機関協議会会長(昭和50年3月31日まで)
昭和50年(1975) 3月31日	「林試情報(現「森研情報」)No.1」刊行
昭和51年(1976) 3月31日	峡南分場廃止
昭和53年(1978) 3月	「山梨県森林計画区別主要樹種林分収穫表(ヒノキ、アカマツ、カラマツ)」刊行
昭和56年(1981) 3月	「土地分類基本調査(土壌図)」刊行開始(平成5年3月まで合計11冊)
昭和58年(1983) 4月1日	全国林業試験研究機関協議会会長(昭和60年3月31日まで)
昭和59年(1984) 4月1日	林業試験場、林業研修所および林産事務所の三場所を統合し、山梨県林業技術センター設置 [総務課、試験研究部、技術開発部、研修指導部、富士分場、富沢採種園](中巨摩郡白根町、甲府市岩窪町、富士吉田市、富沢町)
昭和60年(1985) 4月1日	「旧県営篠尾苗畑」において「特用・薬用樹木園造成事業(県単)」開始
昭和62年(1987) 10月14~16日	第39回日本林学会関東支部大会開催(山梨大学外)
平成4年(1992) 4月1日	山梨県林業技術センターの組織変更 [総務課、企画指導部、森林環境部、資源利用部、富士分場、富沢採種園]
平成6年(1994) 4月1日	山梨県林業技術センターを改組し、南巨摩郡増穂町に山梨県森林総合研究所設置
平成6年(1994) 4月1日	山梨県森林総合研究所研究基本計画(第1次)策定

年 時	内 容
平成6年(1994) 4月27日	山梨県森林総合研究所竣工式挙行
平成7年(1995) 4月1日	富士分場を富士吉田支所に名称変更
平成7年(1995) 7月12日	皇太子殿下・雅子妃殿下行啓
平成7年(1995) 10月3~4日	第47回日本森林学会関東支部大会開催(山梨大学)
平成8年(1996) 3月25日	富士吉田市新西原に山梨県森林総合研究所富士吉田支所(現富士吉田試験園)を新築移転し竣工式挙行
平成9年(1997)	富士吉田支所を富士吉田試験園に名称変更
平成9年(1997) 5月28日	北巨摩郡小淵沢町上笹尾にハヶ岳薬用植物園(旧県営篠尾苗畑)開園
平成11年(1999) 2月1日	「山梨県森林総合研究所研究報告第20号」刊行
平成11年(1999) 3月	「有用広葉樹 苗木のつくり方」刊行
平成11年(1999) 3月31日	山梨県森林総合研究所研究基本計画(第2次)策定
平成13年(2001) 3月	「ニホンジカ個体群管理のための基礎的調査—富士北麓編—」刊行
平成16年(2004) 3月31日	山梨県森林総合研究所研究基本計画(第3次)策定
平成17年(2005) 10月2日	創立70周年記念式典開催および研究所の一般公開
平成17年(2005) 10月27~28日	第57回日本林学会関東支部大会開催(KKRニュー芙蓉)
平成18年(2006) 4月1日	林業普及指導員の研究所集中配置にともない組織変更 [総務課、普及指導部、森林環境研究部、資源利用研究部、富士吉田試験園、南部林木育種園、ハヶ岳薬用植物園]
平成21年(2009) 3月31日	山梨県森林総合研究所研究基本計画(第4次)策定
平成21年(2009) 3月	「森や木を野生動物から守る—獣害防除事例集—」刊行
平成21年(2009) 4月1日	組織変更 [総務課、普及指導部、森林研究部、富士吉田試験園、南部林木育種園、ハヶ岳薬用植物園]
平成23年(2011) 3月31日	「山梨県森林総合研究所研究報告第30号」刊行
平成24年(2012) 4月1日	林業普及指導員を本庁及び林務環境事務所、森林総合研究所に分散配置 [総務スタッフ、研修・普及科、森林研究部、富士吉田試験園、南部林木育種園、ハヶ岳薬用植物園]
平成26年(2014) 10月17日	第4回関東森林学会開催(KKRニュー芙蓉)
平成26年(2014) 3月31日	第5次山梨県森林総合研究所研究基本計画策定
平成27年(2015) 10月1日	創立80周年記念式典開催
平成31年(2019) 3月31日	第6次山梨県森林総合研究所研究基本計画策定
令和4年(2022) 4月1日	専門学校山梨県立農林大学校森林学科開講。本研究所内に富士川キャンパス設置
令和5年(2023) 11月2日	第13回関東森林学会大会開催(山梨県JA会館)
令和6年(2024) 3月31日	第7次山梨県森林総合研究所研究基本計画策定

## II. 平成 27(2015)年度以降の山梨県森林総合研究所研究報告掲載論文の要旨

## 第 35 号:1-3(2015)

飯島 勇人・長池 卓男「亜高山帯針葉樹林の更新動態にニホンジカが与える影響～防鹿柵設置 5 年後の比較から～」

ニホンジカによる摂食が亜高山帯針葉樹林の動態に与える影響を明らかにするため、2010 年に南アルプス国立公園の北沢峠周辺の亜高山帯針葉樹林において調査区を設定し、立木(高さ 1.3m の直径 DBH が 3cm 以上)および稚樹(樹高 30cm 以上で DBH3cm 未満)のサイズ、樹種、剥皮率(周囲長に占める剥皮部分の割合)を調査した。また、調査区の半数に防鹿柵を設置した。2014 年に同様の調査を行った。2010 年時点で、立木よりも稚樹の方が剥皮率が高く、特に標高 2000m 付近の調査区における死亡稚樹に占める剥皮率は、平均で 94.4%と非常に高かった。2014 年に新たに発生した剥皮は立木及び稚樹で非常に少なく、更新した立木及び稚樹の数は柵内外で差が見られなかった。2010 年に生存していて 2014 年に死亡した立木及び稚樹は、2010 年時点での剥皮率が高い個体であった。そのため、この 5 年間に於いてニホンジカによる剥皮は少なかったものの、稚樹を選択的に剥皮し、剥皮率が高い場合に立木や稚樹の死亡率を高めることで、ニホンジカは亜高山帯針葉樹林の樹木の動態に影響を与えたと考えられた。

## 第 35 号:5-9(2015)

飯島 勇人「2014 年に山梨県で発生した大雪がニホンジカの動態に与えた影響」

2014 年 2 月に、山梨県内で記録的な大雪が発生した。他地域では大雪が発生した際にニホンジカが大量に死亡することが報告されていることから、大雪が山梨県のニホンジカ個体群の動態に与えた影響を明らかにすることは、今後の山梨県のニホンジカ個体群管理の上で重要である。そこで、ニホンジカの死亡個体を報告する様式を作成し、大雪発生後の 2014 年 3 月から 6 月にかけて、ニホンジカの死亡個体に関する情報を収集した。報告された死亡個体は 214 個体であった。傾斜が急な場所ほど餓死ではなく雪崩によって死亡していたと報告される傾向にあった。1 歳以上のメスは死亡個体の 46%を占めていた。大雪によって死亡した個体の割合はほとんどの場所で低かったが、一部の場所では 30%以上の死亡が発生していた。以上の結果から、2014 年 2 月に山梨県で発生した大雪は、場所によってはニホンジカの数を減少、あるいは増加を抑制していた可能性が示唆された。

## 第 35 号:11-16(2015)

大津 千晶「播種工が施工された治山林道法面における施工後初期の緑化成績に影響を与える要因」

施工後初期の法面の緑化成績に影響を与える要因を調べた。クリーピングレッドフェスク、トルフェスクは発生期待本数が多いほど成績は上がる傾向にあった一方、ススキ、ホワイトクローバー、コマツナギは発生期待本数が多いほど成績は下がる傾向にあった。傾斜角度が急になるほど成績は低下し、斜面方位については東、北、南、西の順に成績が低下した。イネ科の草本種が 1000 本/m<sup>2</sup>程度以上播種された箇所では、緑化成績が「可」以上となる傾向にあった。

## 第 35 号:17-29(2015)

高野 昭人・戸沢 一宏・柴田 尚「山梨県内における薬用植物資源の調査」

2012 年 4 月から約 3 年間、山梨県内各地において、自生する薬用植物資源について調査を行ってきた。本稿では、特に注目して調査を行ったサルノコシカケ科マツホド(茯苓)とキンボウゲ科オウレン属植物についての調査結果を報告する。また県内を調査した結果、資源として注目された、トリカブト、サラシナショウマ、ウスバサイシン、センブリなどの薬用植物について紹介する。さらに 2014 年 9 月に北岳で行った調査で観察した植物リストを添付した。

## 第 35 号:31-36(2015)

本多 琢己「異なる試験方法によるスギ正角材の強度特性及び含水率の評価」

高温セット法により乾燥されたスギ正角材を供試材とし、3 等分点 4 点荷重式、小荷重載荷式及び打撃式による曲げ強度試験を行い、各方式による曲げ強度性能を評価した。曲げ強さ(MOR)と曲げヤング係数(MOE)の間に強い相関( $r=0.67$ )が認められ、次式により MOE だけから MOR を精度良く推定できる。動的ヤング係数も曲げヤング係数にほぼ等しかった。一方、MOR と最大節径比及び最大集中節径比との相関は低かった。機械等級により区分を行うと MOR の変動が減少することがわかった。次にマイクロ波式、高周波式及び電気抵抗式の 3 方式で水分測定を行った。マイクロ波

式では養生の有無に関わらず含水率との誤差が最も小さかった。養生前の厚さ方向の水分傾斜をもつ場合は、マイクロ波式の最大値と最小値の差を用いて、高周波式で測定された材を区分することによって、危険側に評価された材の 95% を抽出可能であった。また、養生後の水分傾斜が平準化された状態の測定においても、マイクロ波式では高周波式で危険側に評価された材の 75% を安全側に評価できた。

#### 第 35 号:37-41(2015)

##### 小澤雅之「伐木造材機による造材作業の分析」

伐木造材機による造材作業の様子をビデオ撮影し、作業分析を行った。実際の現場は多様であるが、今回は一つの指針を示すために全て同一の条件下として解析した。総作業時間に占める造材時間の割合は 64.6% だった。また、伐木造材機による造材本数は 1 時間あたり 45 本程度と推算された。造材木の積上げ場所は伐木造材機の設置場所と機体の可動領域に制限され、造材作業の生産性が低下するため、適切に搬出する必要性が認められた。

#### 第 35 号:43-46(2015)

##### 大地純平「テキストマイニングを用いた山梨県森林 GIS 利用者アンケートの分析」

平成 26 年 4 月 1 日付で運用開始された改訂版山梨県森林 GIS「山梨県森林情報管理システム」の利用状況や改善項目を調べるため、森林環境部職員を対象にアンケート調査を行った。調査の結果、回答した職員の 44% が業務利用しており、「保安林整備、森林計画、県有林に関する造林計画・発注」など様々な業務で利用されていることが分かった。また、今後特に必要な事としては「マニュアル作成」と「操作方法研修の開催」が挙げられた。

#### 第 36 号:1-5(2017)

##### 飯島勇人「甘利山における 2 種類のシカ密度指標の動態」

山梨県韮崎市甘利山におけるニホンジカの密度を把握するため、糞粒法とカメラトラップ法を甘利山で行った。糞粒法は草原と森林で 20 調査区 (1 つの調査区は 1×1m) ずつ設置し、毎月新たに排泄された糞粒数を調べた。しかし、調査区内に排泄される糞粒が非常に少なく、個体数を推定することはできなかった。一方、10 台の自動撮影カメラを設置したところ、ニホンジカは合計で 325 個体撮影され、その密度は 7 月は 9.4 頭/km<sup>2</sup>、8 月は 6.9 頭/km<sup>2</sup>、9 月は 7.9 頭/km<sup>2</sup>、10 月は 7.3 頭/km<sup>2</sup>、11 月は 6.2 頭/km<sup>2</sup> と推定された。今後は、他の推定方法との比較を行い、カメラトラップ法の推定値の妥当性を検証する必要がある。

#### 第 36 号:6-9(2017)

##### 長池卓男「山梨県森林総合研究所実験林アカマツ枯損調査区における林分動態とニホンジカの剥皮」

山梨県森林総合研究所実験林アカマツ枯損調査区において、天然更新した樹木を中心として伐倒燻蒸処理 11 年後の林分動態とニホンジカの剥皮の状況を調査した。2014 年の胸高直径 3cm 以上の新規加入幹数が 2008 年に比較して約 5 倍増加し、コナラとクリが多かった。新規加入幹数に対して、2008 年は約 30% が萌芽由来であったが、2014 年には約 60% であった。2014 年のニホンジカによる剥皮は、2003 年の 18 倍、2008 年の 5 倍に増加していた。主に剥皮されていたのはリョウブとウリカエデで、将来的に林冠層を構成する高木性樹種として期待されるコナラ、クリやカスミザクラへの剥皮は少なかった。コナラの順調な成長と更新がこのまま継続するとすれば、アカマツとコナラにより林冠が構成される可能性が高い。

#### 第 36 号:10-19(2017)

##### 大津千晶「乙女高原の半自然草原群落内に出現した維管束植物」

山梨市の乙女高原の高基草本群落に出現する野生植物の目録を作成した。調査の結果、60 科 144 属 214 種 (草本種:171、木本種:43) の維管束植物が記録された。

#### 第 37 号:1-4(2018)

##### 長池卓男・荒川史子「ニホンジカに剥皮されたカラマツ人工林を構成する樹種の 12 年間の生残」

カラマツ人工林で 2005 年に剥皮の状況を調査した林分を 2017 年に再調査し、剥皮の状況や生残について明らか

にした。全体として、剥皮本数は減少しているものの、2005年から2017年の間に新たに剥皮された生立木もみられた。2005年の剥皮率(ニホンジカにより最も広く剥皮されている部位における幹の全周に対する剥皮割合)が高い幹ほど、2017年には枯死している傾向が高かった。ウラジロモミでは、剥皮率が低くても枯死している割合が高いが、カラマツやミヤマアオダモは剥皮率が80%を超えると枯死している割合が高いものの、剥皮率が比較的高くても生存している幹もみられた。したがって、樹種により剥皮からの耐性が異なることが示唆された。カラマツでの2005年と2017年の剥皮率を比較すると、樹皮の再生によって剥皮率が減少している個体も見られるものの、剥皮率が増大して再度剥皮されている個体のほうが多かった。したがって、今後も剥皮が継続されれば、枯死率が増大することが推測される。

#### 第37号:5-9(2018)

長池卓男「カラマツ人工林と落葉広葉樹二次林におけるササ類へのニホンジカの影響」

北杜市須玉町内県有林でササ類(スズタケ、ミヤコザサ)が生育しているカラマツ人工林とミズナラを主とする落葉広葉樹二次林において、それらの高さや被度を1999年と2017年で比較した。ミヤコザサのそれらは増加もしくは維持されていたものの、スズタケでは大きく減少していた。この期間のニホンジカの推定個体数が急増していること、開空度も増大しているがスズタケの再生が見られないことから、ニホンジカの摂食によるスズタケの衰退が示唆された。スズタケが衰退もしくは消滅し再生しない林分では、これまでの土壌被覆効果が失われるため、土壌浸食等に留意する必要がある。

#### 第37号:10-14(2018)

小澤雅之「除湿空気によるチップ材の乾燥」

燃料用チップの含水率管理として、既存の設備を流用したチップ乾燥法を検討した。外部の湿度に関係なく、無風状態ではチップの乾燥は進まないが、送風を行うことでチップの含水率を低減させられることが認められた。さらに、送風時に用いる空気の湿度が低ければ、市販の除湿機を用いてチップの乾燥をより進行させられることが示唆された。

#### 第37号:15-21(2018)

戸沢一宏・小林 浩・小泉美樹・木村英生・樋口かよ・尾形美貴・長谷川達也・北島潤一・高野昭人・小松弘幸「新しいバイオマーカーによる山梨県内有用植物等探索と活用」

腎機能障害の指標として尿たんぱく等が用いられているが、最近では初期の腎機能障害に対するバイオマーカーとして、L-FABPが臨床で用いられている。このL-FABPの抑制する植物等が腎機能障害への進行を抑制することができる考え、有用な植物を探索した。効果の確認には、ヒトのL-FABP発現遺伝子を導入したマウス(hL-FABP Tg マウス、シミックファーマサイエンス所有)を用い、シスプラチン投与後のL-FABPの上昇を比較し、効果を確認した。この結果、モモの花、ウコギ等で抑制効果が確認された。

#### 第38号:1-4(2019)

長池卓男・飯島勇人・荒川史子「甲武信ヶ岳周辺の亜高山帯針葉樹林におけるニホンジカの剥皮の影響」

奥秩父地域甲武信ヶ岳周辺のシラビソが優占する亜高山帯針葉樹林において、2009年から2018年にかけてのニホンジカの剥皮の影響について明らかにした。2018年の立木密度は2009年の66%に減少しており、特にオオシラビソの減少(44%)が顕著であった。優占するシラビソとオオシラビソは、両年とも剥皮されていない立木(剥皮率0%)が最も多かった。しかし、剥皮された立木は、シラビソは66本から114本、オオシラビソは13本から23本へと、ほぼ倍増していた。両種ともに、調査期間中に枯死した立木のうち、剥皮されずに枯死した立木(剥皮率0%)が約9割であり、立ち枯れによって枯死していたものが最も多かった。

#### 第38号:5-14(2019)

大津千晶「甘利山の半自然草原における人の利活用がニホンジカの出現状況に直接的・間接的に与える影響」

甘利山の半自然草原では、草原生植物の保全を目的として、草原の一部で市民やボランティアによる草刈りが行われている。一方、近年はニホンジカ(以下、シカ)の植生への影響が顕在化しつつあり、草原生植物の保全上の課題となっている。そこで甘利山において、人による刈り取り管理が草原群落の種構成に与える影響を調べるとともに、群落へのシカの出現に影響を与える要因を、人の利活用の影響も含めて明らかにすることを目的とした。人による刈り取り管理が草

原植生に与える影響を評価するために、刈り取り管理が実施されてきた群落と実施されていない群落で植生調査を実施した。シカの出現状況を把握するために、草原群落と周辺の森林群落に自動撮影カメラを設置し、シカの撮影枚数を記録した。撮影枚数はカメラごと、月ごと、昼夜ごとに集計し、撮影枚数に影響を与える要因を推定した。その結果、草刈りが継続的に実施されている箇所ではされていない箇所よりも優占種であるミヤコザサの植被率、植生高が低く、広葉草本種を中心に多くの種が出現した。シカの出現頻度は、人の撮影枚数が多い時期や場所では低くなり、草原よりも森林で、ミヤコザサの植被率が高い場所よりも低い場所が高くなった。季節では夏、昼夜では夜に高くなった。以上の結果から、人の活動が活発な場所・時期をシカが回避していると考えられた。一方、継続的な草刈りは優占種の植被率を低くし、シカの嗜好性が高い広葉草本も増加させる。そのため、シカの密度が一定以下に低減されていない状態での草刈りは、シカの草原の利用を増加させ、かえって草原植生の衰退を招く可能性もある。シカの密度が低減されていない場合は、刈り取りした場所では応急的に植生保護柵を設置するなどの対策が必要と考えられる。

#### 第 38 号:15-18(2019)

長池卓男・松崎誠司「シラビソ人工林帯状伐採地に植栽された落葉広葉樹 5 種の生残と成長」

シラビソ人工林で帯状伐採された場所に植栽された落葉広葉樹の生残と成長を調査した。調査開始時の 2007 年は合計で 401 本であったが、2017 年には 263 本に減少していた。ヤマハンノキは他の 4 種に比較して生存率が低かった。最も良く樹高成長していたのはヤマハンノキで、ブナは最も成長が悪かった。各個体の樹高成長曲線を回帰直線で近似した決定係数は、0.8 以上、すなわち、毎年順調に成長を続けていると推定される個体が、イロハモミジは 85%、ミズナラ・ヤマザクラ・ヤマハンノキは約 70%をそれぞれ占めていたのに対し、ブナは 30%であった。また、ブナは決定係数が 0.3 未満(成長が一定ではなく、低下等が見られる)の割合が約 40%を占め、他の 4 種とは大きく異なる成長パターンを示していることが明らかとなった。

#### 第 38 号:19-22(2019)

小澤雅之「針葉樹薪材の乾燥と品質」

ヒノキおよびスギの間伐材を薪として利用するため、天然乾燥を 1 年および 2 年間行った。屋根があるところと、屋根がないところで天然乾燥させ、定期的に質量を測定した。その結果、両樹種とも屋根の有無に関わらず、乾燥開始から 120 日までに著しく質量が減少するが、その後はあまり質量が減少しないことが認められた。その後、1 年および 2 年間乾燥させた針葉樹薪材を実際に薪ストーブユーザに使ってもらったところ、薪として 1 年乾燥させたものと 2 年乾燥させたものでは差異はないが、ともに火持ちがして暖かく、灰量は少なかったとの回答が寄せられた。従って、ヒノキやスギでも十分に乾燥させれば薪として利用することができると思われる。

#### 第 39 号:1-4(2020)

長池卓男・荒川史子「高標高カラマツ人工林の動態に及ぼすニホンジカの剥皮の影響」

高標高域に造成されたカラマツ人工林において、カラマツと天然更新木へのニホンジカによる剥皮の状況について、16 年間の変化やその影響について明らかにした。立木本数は、各調査区とも一貫して減少していた。各調査区とも、カラマツの減少も見られるものの、カラマツ以外の天然更新した樹種の減少の方が顕著であった。天然更新したシラビソが最も剥皮されており、カラマツは全ての調査区で剥皮されていなかった。枯死木に占める剥皮木の割合は、最も高かった調査区においても 25%程度であり、剥皮による枯死よりもその他の要因(例えば、競争)で枯死している木の方が多かった。しかし、剥皮本数の多い調査区では剥皮による枯死率も高かったことから、剥皮は林分構造や種組成に影響を及ぼしていた。

#### 第 39 号:5-8(2020)

長池卓男「列状間伐を実施した人工林における倒木の発生状況」

山梨県内の列状間伐施工地における伐採後の倒木の発生状況について、11 小班(計 22 調査区)で調査した。今回調査した範囲での列状間伐は、残存木の倒木の発生に深刻な影響を与えてはいなかった。

## 第 39 号:9-14(2020)

## 大地純平「野生動物による放置竹林、管理竹林の利用状況」

3年間の調査において、タケノコ生産期にイノシシが自動撮影カメラを設置した管理竹林に侵入することは無かった。これは、イノシシ侵入防止用に設置された電気柵が十分効力を発揮した結果であると考えられた。一方でニホンジカ、ニホンザルは自由に入出入りすることが出来る状況で、タケノコを摂食することが確認された。放置竹林ではイノシシによる竹林利用が確認されたが、竹林整備を行うことにより、その後 6ヶ月間は利用が確認されなかった。ニホンジカについては竹林整備の前後にかかわらず頻繁に確認された。以上のことから、管理竹林においてタケノコを食害していたのは、主にニホンジカ、ニホンザルであったことが示唆された。また、放置竹林の整備はイノシシに警戒感を与え一定の忌避効果がある事が確認された。

## 第 39 号:15-21(2020)

## 大地純平「市販資材を用いたニホンジカ用簡易囲い罠の開発」

本研究では、「①誰でも容易に囲い罠を設置・運用が可能な事」「②囲い罠資材の確保が容易な事」「③ニホンジカの効率的な捕獲が可能な事」の3点に注目し、「市販資材を用いた簡易囲い罠によるニホンジカ誘引捕獲」について研究を行った。囲い罠資材はホームセンターや建築資材店等で購入可能な単管パイプ、落下防止ネットなどを用いて、10万円以下の資金で構築できるように設計した。また、オプションとして 150m 程度離れた場所から監視とゲート閉鎖を行うことのできる遠隔閉鎖装置を用意した。囲い罠を用いた誘引・捕獲試験は山梨県南アルプス市高尾の牧場採草地を利用して実施した。ニホンジカ誘引試験では、週 2 回(火曜日、金曜日)囲い罠内外にハイキューブを給餌し、採食の様子を自動撮影カメラで記録した。捕獲については、誘引個体数、馴致の様子を確認して適宜実施した。試験結果から、市販資材を用いた簡易囲い罠であっても、ニホンジカ捕獲に耐える十分な性能を確保できること、週 2 回程度の給餌であっても十分な誘引効果がある事を確認することが出来た。

## 第 39 号:23-27(2020)

## 大地純平「熱赤外線カメラ搭載 UAV を用いた雪山遭難者の視認性試験」

熱赤外線カメラは観測対象と周辺環境の温度差を感知し映像化する装置である。本試験では雪山遭難者の搜索を想定して、遭難者の姿勢、待機場所、着衣などの状況によって熱赤外線カメラでどのように観測されるのかを調べた。遭難者が座ってササ藪の中などに居る場合などは、遭難者とササ藪の温度差が小さく、混ざり合って判別が難しい。シート類についてはレスキューシート、アルミブランケットなどを使用した場合、高い遮熱効果により熱赤外線カメラで感知できない場合があることが分かった。

## 第 39 号:29-32(2020)

## 小澤雅之「燃料用チップの天然乾燥」

熱ボイラで使用されているチップの天然乾燥法について、破碎前の枝葉の状態、チップを封入したフレコンバックおよびチップを堆積させた状態で検討した。その結果、枝葉等の状態で天然乾燥させると、質量は減少したが、フレコンバックに入れた状態では質量は減少しなかった。また、フレコンバックに封入した場合およびチップを堆積させた状態では、いずれも表面は乾燥したが、内部は十分に乾燥しない結果になった。さらに、堆積させたチップを夏期に天然乾燥させたところ、堆積させた表面の 30mm 程度までは数日で乾燥するが、内部はほとんど乾燥しない結果となった。従って、チップや未利用材を天然乾燥させるには、気温よりも外気との接触が重要であると考えられる。

## 第 40 号:1-4(2021)

## 大澤正嗣・飯島勇人「山梨県におけるマツノマダラカミキリの発生予察」

山梨県富士川町にある山梨県森林総合研究所網室にて、マツノマダラカミキリの発生予察を 27 年間行った。27 年間の平均初発日は 5 月 29 日、50%発生日は 6 月 25 日、終発日は 7 月 24 日だった。初発までの有効積算温量は 27 年間の平均で 333 日度だった。GLM で解析したところ、その年の 4 月末までの日平均気温が 11°C 以上だった日の日平均気温の積算温量により、マツノマダラカミキリの発生時期(初発日)がある程度推定できることが示された。

## 第 40 号:5-9(2021)

## 長池卓男「富士山 2 合目のブナ老齢林における 18 年間の林分動態」

2002 年に富士山 2 合目付近のブナ林に設置した 2 つの調査区における 18 年間の林分動態を示した。立木密度について Plot1 の 2002-2008 年は新規加入率が枯死率を上回っていたが、それ以後は枯死率の方が上回っていた。Plot2 では、2008-2014 年で新規加入率が上回っていたが、それ以外の期間では枯死率が上回っていた。全体的な林分動態を見ると、立木密度は両 Plot とも減少、胸高断面積合計は Plot1 では増加、Plot2 では減少の傾向がみられた。ニホンジカによる剥皮本数は Plot2 で多かった。Plot2 ではオオイタヤメイゲツへの剥皮が増加していた。枯死した幹数に対する剥皮されていた幹数の割合は、Plot1 では増加傾向にあった。ナナカマドのような特定の樹種に剥皮が集中した結果、Plot2 のナナカマドは 2020 年には消失しており、種構成に変化が生じていた。

## 第 40 号:11-14(2021)

## 小澤雅之・伊原隆伸・櫻田尚人「チップの天然乾燥における置換効果」

バイオマス熱ボイラで使用されているチップの天然乾燥法について、チップを堆積させたモデルを用いて堆積塊内部でのチップの含水率変化について検討した。チップを堆積させたまま 7 日間天然乾燥させると、全体の含水率は減少するが、裏面部の含水率と表面部の含水率とでは差が生じ、裏面は表面ほど乾燥しない結果になった。そこで、乾燥 3 日後に表面と裏面とを置換して乾燥させたところ、それまで高い含水率であった裏面部のチップは表面部に配置されたことで含水率は低下したが、ある程度乾燥していた表面部のチップが裏面に配置されたことで、乾燥 7 日後の含水率は増加した。チップを効率的に天然乾燥させるには、外気との接触を最大限にすること、ある程度乾燥したチップを系から除去・分離し未乾燥チップを露出させる循環などが有効であると思われる。

## 第 40 号:15-21(2021)

## 大地純平「植栽季節が異なるヒノキコンテナ苗の活着・成長と造林の課題」

山梨県内 3 地域にヒノキコンテナ苗 (35cm 上:以下「コンテナ苗」)、県産ヒノキ裸苗 (65cm 上:以下「裸苗」) を植栽し、その活着・成長について調査を行った。コンテナ苗は夏、秋、春、裸苗は秋、春に植栽を行った。コンテナ苗の活着率は春≧秋>夏の順で高い傾向にあり、活着率に差があるが春秋でのコンテナ苗植栽に可能性がある。また、一年目調査ではヒノキコンテナ苗春植えは裸苗春植えよりも 10%程度高い活着率を示した。植栽時のコンテナ苗と裸苗の樹高、根元直径には倍近く差があり、コンテナ苗は一年の成長で裸苗植栽時と同程度のサイズに成長したが、本試験期間中に裸苗の樹高、根元直径に追いつくことはなかった。コンテナ苗は春秋植栽の活着率で裸苗より優位で、植栽期間拡大による事業計画の自由度を上げるが、一方で裸苗の成長はコンテナ苗より 1 年先取りする形で優位であり、育林期間の短縮につながることから、効率化と事業経費の面でコンテナ苗および裸苗のどちらが有利であるか十分に検討する必要がある。

## 第 40 号:23-26(2021)

## 戸沢一宏「カンゾウの苗生産方法の確立」

ウラルカンゾウは生薬としての使用量が多く、種子を含めてそのほとんどが輸入である。そこで、種子に頼らない苗の生産方法の開発を試みた。MS 培地+IAA および挿し芽により、効率的な苗の生産が可能となった。

## 第 41 号:1-28(2022)

## 大澤正嗣「山梨県において飛翔昆虫用トラップで捕獲されたカミキリムシ」

1999 年～2018 年の間に、害虫調査や昆虫多様性調査のため設置した昆虫捕獲用トラップによって、捕獲されたカミキリムシを同定した。209 種のカミキリムシが捕獲され、これらを山梨県内各地域におけるカミキリムシのファウナの一部として報告する。

## 第 41 号:29-30(2022)

## 長池卓男・末木 文「コウヨウザンの埋土種子形成可能性」

コウヨウザンの埋土種子形成可能性を明らかにするため、土中に種子を埋設し、1 年後または 2 年後にその種子を掘

り出し、撒き出し法によって発芽能力を調べた。その結果、発芽した種子はなく、埋土種子形成可能性は低いことが示唆された。

第 41 号:31-33(2022)

戸沢一宏「キヌガサタケの栽培」

主に竹林に発生するキヌガサタケの栽培を可能にするため、菌株の収集・各系統の菌系の慎重に対する最適条件の検討、培地構成についての影響について調査した。その結果、栽培最適温度は 20-30℃、培地基材に竹粉などが使用できること、栄養源は、米ぬか 20%が最適な条件であることが判明した。

第 42 号:1-18(2023)

大澤正嗣「山梨県のコメツキムシ相 -飛翔昆虫用トラップでの捕獲-」

1999 年~2019 年の間に、害虫調査や昆虫多様性調査のため設置した昆虫捕獲用トラップによって、捕獲されたコメツキムシを同定した。142 種のコメツキムシが捕獲され、これらを山梨県内各地域におけるコメツキムシのファウナの一部分として報告する。

第 42 号:19-20(2023)

戸沢一宏・長池卓男・長谷川喬平・末木 文「低コスト更新技術の開発に関する研究」

皆伐地における低コスト森林更新技術を開発するため、植栽地付近にある樹木から挿穂や種子を採取し、それを基に再造林を試みた。種子からの発芽は観察されなかったが、ヤナギ類の挿木により、更新が可能であることが判明した。

第 42 号:21-25(2023)

長池卓男「杖立峠周辺の高標高人工林における林分動態とニホンジカの剥皮」

鳳凰三山杖立峠周辺の高標高人工林におけるニホンジカの剥皮の影響について明らかにした。2014 年に、人工林 3 箇所 (H11、H12、H13) に 10×40m の調査区を設定した。それぞれの調査区において、胸高直径 3cm 以上の立木を対象に個体識別を行い、樹種と胸高周囲長を把握する毎木調査を実施した。その際、ニホンジカによる剥皮の有無も記録した。同様の調査を 2018 および 2022 年に実施し、枯死や新規加入についても記録した。H11 は、植栽されたシラビンがニホンジカの剥皮に好適なサイズよりも大きかったことで、立木密度も変わらず、胸高断面積合計が増加したことが推測される。一方、H12 は、枯死木の多くが剥皮木であり、天然更新したシラビンの優占度が低下していた。H13 は、他の 2 つの調査区と比較して、5-10cm クラスが最も多く、その減少が顕著であった。剥皮の影響は小さかったことから、小径木での競争による減少がもたらしたものと思われる。H11 の剥皮率や H12 での枯死木に占める剥皮木の割合は山梨県内でも最も高い値であるため、森林の維持のために、ニホンジカの影響を今後も注視する必要がある。

第 42 号:27-30(2023)

小澤雅之・伊原隆伸・櫻田尚人「網棚乾燥装置におけるチップの含水率変化」

熱ボイラ用チップを天然乾燥させるために網棚乾燥装置を試作した。網目により、最下面の通気を確保した開放型と、防水シートで網目の通風を阻害した閉塞型とで冬に 1 週間天然乾燥を行った。チップ全体の乾燥では、閉塞型より開放型で含水率減少率が大きかった。一方、堆積させたチップの表面における含水率減少率は、開放型と閉塞型では同程度の含水率減少率を示したが、最下面では明らかに開放型よりも含水率減少率が小さいことが認められた。開放型であれば堆積させたチップ堆積塊内部にわたりほぼ均等に乾燥しているが、閉塞型では塊内部に乾燥速度に差異が生じるものと思われる。また、チップの乾燥には外気との接触が重要な役割であることが推察された。

第 42 号:31-34(2023)

小澤雅之・伊原隆伸・櫻田尚人「バイオマス熱ボイラ炉におけるチップ含水率の影響」

商用熱ボイラで使われているチップの含水率を約 27 ヶ月間測定した。使用されていたチップは皆伐で生じた未利用材であったが、人工乾燥していないため、含水率の変動が大きく不均一であった。提供されたチップの含水率の最小値は 6.5%、最大値は 135.0%となった。含水率の平均値は 49.5%となり、含水率 40~60%が全体の約 40%を占めた。網棚

乾燥装置によりこのチップを 1 週間天然乾燥させた。乾燥後、商用熱ボイラに投入し、従来の未乾燥チップとの燃焼挙動の差異について検討した。未乾燥チップが燃焼していた時間帯の炉内酸素濃度の平均値は 10.7%を示した。乾燥チップが燃焼していた時間帯の炉内酸素濃度の平均値は 11.8%を示した。含水率のより低いチップを供給すれば、送り込む酸素量を減らしても炉内を安定的に燃焼させることができると推察された。

#### 第 43 号:1-4(2024)

##### 長谷川喬平「山梨県におけるカラマツコンテナ苗の 3 年間の生存と成長」

山梨県内 7 箇所に植栽されたカラマツコンテナ苗の生存と成長について 3 成長期間調査を行った。コンテナ苗の活着は調査地間によって異なり、植栽後 1 成長期の枯死率が 20%近い調査地が 5 箇所見られた。そのためコンテナ苗の活着を過信するのは危険と考えられた。樹高と直径は植栽から経過年数により調査地間で差が見られた。形状比と樹高成長の関係は明瞭ではなかった。

#### 第 43 号:5-18(2024)

##### 大澤正嗣「山梨県のハムシ相 -24 年間の捕獲記録-」

1999 年~2022 年の間に、害虫調査や昆虫多様性調査のため設置した昆虫捕獲用トラップによって捕獲されたハムシ科甲虫を同定した。133 種のハムシが捕獲され、これらを山梨県内各地域におけるハムシのフォアナの一部分として報告する。12 種が山梨県新産であった。

#### 第 43 号:19-22(2024)

##### 戸沢一宏「新たなきのこ菌床栽培方法の確立」

現在山梨県のきのこ生産については、原木シイタケ、菌床シイタケが主流で、菌床ビン栽培でナメコ、エリンギ、ヒラタケ等を生産している。山梨県で開発したクロアワビタケ(山梨夏っ子きのこ®)も栽培が始まっている。新たに菌床栽培(袋栽培)で生産可能なきのこを供給するための栽培方法を検討した。その結果、シロアラゲキクラゲとハタケシメジの栽培方法を確立した。特にハタケシメジでは、覆土にバーク堆肥を用いない方法が可能となった。

#### 第 43 号:23-26(2024)

##### 長池卓男「シラビソ人工林帯状伐採地において天然更新したカラマツへのニホンジカ剥皮」

シラビソ人工林とその帯状伐採地を含む 1.06ha に調査区を設定し、調査区内の樹高 30cm 以上の天然更新している高木性稚樹を対象に調査を実施した。調査区内で 287 本の高木性稚樹が出現し、うち 259 本がカラマツであった。天然更新したカラマツは、平均樹高は 371cm、最大樹高は 995cm であった。樹高 1.3m 以上のカラマツ天然更新木は、調査区全体で 200 本であり、平均胸高直径は 4.3cm、最大胸高直径は 14.1cm であった。ニホンジカの剥皮率は、0% (全く剥皮されていない) の個体が最も多かったが(カラマツ全個体数の 51%)、カラマツ全個体の約半数が剥皮されており、そのうち、幹の 50%以上剥皮されている個体が 18%あまりを占めていた。天然更新による低コスト更新が期待されるものの、樹皮を剥皮された幹は木材としての価値が大きく低下するため、将来的な木材生産を天然更新で考えるならば、ニホンジカの剥皮の影響は無視できないだろう。

#### 第 43 号:27-30(2024)

##### 大地純平「UAV を用いた下刈り作業地の作業確認」

下刈り作業地の作業確認(検査)の効率化を目指すため、UAV オルソ画像等を活用して 5 試験地で調査を行い、①撮影方法、②撮影タイミング、③利活用について検討を行った。市販の業務用小型 UAV を使用し、下刈り前と下刈り後の最低 2 回の撮影(高度 60m、OL (Over Lap):80%、SL (Side Lap):60%)で検査に十分なオルソ画像(解像度 2~3cm)を取得できた。また、下刈り作業から 1~3 週間経過後の間に撮影したオルソ画像(刈り取った下草が枯れ、亜麻色に変色)と下刈り前のオルソ画像を比較することで、作業確認が容易であることが分かった。下刈り後の「刈り高」はオルソ画像のみで明確に確認することは出来なかった。しかし、オルソ画像上の変化から、「刈り高」を確認するポイントを絞ることで、現地確認作業の効率と精度を高めることができる。

## 第 44 号:1-18(2025)

長谷川喬平・長池卓男「山梨県のスギ・ヒノキ・カラマツ高齢人工林へ対応した林分材積表の作成」

山梨県の高齢人工林に対応したスギ・ヒノキ・カラマツの林分材積表を作成した。スギ・ヒノキはこれまで使用されてきた樹高成長曲線と比較し、高齢でも樹高成長が継続することが示された。林分材積表は、この樹高成長曲線をはじめとする林分因子の相互関係により、地位別に 4 または 5 齢級から 24 齢級まで作成した。

## 第 44 号:19-28(2025)

大澤正嗣「山梨県のベニボタル相 -24年間の捕獲記録-」

1999 年～2022 年の間に、害虫調査や昆虫多様性調査のため設置した昆虫捕獲用トラップによって、捕獲されたベニボタルを同定した。40 種のベニボタルが捕獲され、これらを山梨県内各地域におけるベニボタルのフォーナの一部として報告する。カクムネクロベニボタル *Cautires nakanei nakanei* (Winkler) はその分布が山梨県で初めて報告された。

## 第 44 号:29-32(2025)

戸沢一宏「森林空間を利用した山菜類の栽培方法の確立」

山梨県内の試験地において、その森林空間及び森林空間内に適していると思われる種を植栽し、成長量や収穫時期などの調査を行った。各試験地では温度、湿度、開空度、照度等の森林環境調査を行った。これらの結果から、それぞれの森林空間、植栽位置に適した山菜をリストアップし、それぞれの種の簡易栽培法について検討し、栽培方法を確立した。

## 第 44 号:33-35(2025)

長池卓男「シラビソ人工林帯状伐採地に植栽したヤマザクラの繁殖開始サイズ」

シラビソ人工林の帯状伐採地に植栽されたヤマザクラの繁殖開始サイズを調べた。2007 年に 158 本植栽され、2023 年には 95 本が生存していた。2023 年には、最大樹高は 871cm となっていた。順調に成長している個体も見られる一方、樹高 200cm に満たない個体も見られた。2024 年まで生存していた 95 本のうち、胸高直径 3cm 以上は 62 本、開花した個体は 19 本であった。19 本のうち 1 本は、胸高直径 3cm 未満であった(樹高は 487cm)。開花個体の最小樹高は 374cm であった。

## 第 44 号:37-39(2025)

長池卓男「富士山精進湖登山道周辺におけるナラ枯れの拡大状況」

富士山精進湖登山道の 2 合目付近の冷温帯老齢林において、2020 年に単木的なナラ枯れを確認した。その後どのようにナラ枯れが拡大するかを 4 年間にわたり明らかにした。2021 年には枯死木は増加していなかったが、2022 年には 4 本増加していた。2023 年には 2 本、2024 年には 1 本が、それぞれ前年と比較して増加していた。本林分では、ナラ枯れは一挙に拡大するのではなく、徐々に拡大していた。2024 年には、精進湖登山道が富士スバルラインと交差する 3 合目バス停付近(標高 1690m)でもナラ枯れが発生した。

## 第 44 号:41-46(2025)

林 耕太・長池卓男「高標高域を中心としたカメラトラップによる野生動物の生息状況の把握」

野生動物のモニタリングを行うことは、動物の保護・管理、森林の生物多様性保全を考える上で重要な課題である。特に中・大型の哺乳類は、広い行動圏や採食量の多さから森林生態系や社会への影響が大きく、モニタリングを行う必要性が高い。しかし、高標高域ではアクセスが容易ではないため、十分な調査がなされていないことが多い。近年野生動物調査にカメラトラップが普及し、効率的に高標高域でも長期間の継続した観察が可能になった。本研究では 5 年間のカメラトラップ調査により山梨県の高標高地域の森林における中・大型の哺乳類を中心とした野生動物の生息状況とその動態を明らかにすることを目的とした。合計 106 台のカメラトラップを南アルプス、ハケ岳、奥秩父山地に設置し、2019 年から 2023 年に撮影されたデータを収集した。その結果 8 科 10 種の中・大型の哺乳類が観察された。撮影された個体の 84.6% がニホンジカであった。カモシカはハケ岳と南アルプスの櫛形山で比較的多く撮影され、ツキノワグマの撮影頻度は全体的に低いものの南アルプスの北岳、鳳凰三山、白州で比較的多く撮影された。観察された哺乳類で期間中の増加・減少傾向はみられなかった。

## 第 44 号:47-50(2025)

## 小澤雅之・武居正道「グラップル操縦者の労働負荷について」

収穫間伐における労働負荷を検討するため、グラップル操縦に従事する作業員にウェアラブル端末を装着し心拍数を測定した。併せてビデオ撮影し、心拍数の経時変化と映像とを重ね合わせた。グラップル作業は 5 つの項目に分類することができた。グラップル搭乗時の心拍数は概ね 100 拍/分以下で推移していたが、100 拍/分超となったときの作業は、慎重を期するような状況や狭い空間でのグラップル操縦時で、操縦者に精神的緊張の程度が強まる場面においては心拍数が上昇するものと推察した。一方、心拍数の上昇が認められてもビデオ映像からは判別出来ないこともあった。

## 第 44 号:51-53(2025)

## 大地純平「産業用マルチコプターを用いた単木アカマツへの薬剤散布」

産業用マルチコプターを用いた単木アカマツへの薬剤散布について、樹頂点からの飛行高度別の葉面展着、地面降着率を調査した。薬剤散布は樹頂点より 3m、6m 上方の飛行高度から行った。何れの飛行高度においても樹頂点の薬剤展着率は 100%であり、樹頂点から地面側に近づくほど展着率が下がる傾向があった。飛行高度が樹頂点より 3m 上方の場合、樹頂点より 4m 下方、飛行高度が樹頂点より 6m 上方の場合、樹頂点から 2m 下方で薬剤の葉面展着率が 20%以下となった。薬剤の地面降着率は何れの飛行高度においても 0.9~2.2%が確認された。

### Ⅲ. 平成 27(2015)年度以降の学会等への発表題名一覧 (1)学会誌

発表者名	年	題名	雑誌名・学会名等	号など
大橋春香(森林総研)・大津千晶ほか	2014	ニホンジカ高密度化に対する脆弱性とRDB掲載種からみた植物群落の保全危急性評価	日本緑化工学会誌	39
滝 久智(森林総研)・飯島勇人ほか	2014	Spatial and temporal influences of conifer planted forests on the orchard pest <i>Plautia stali</i> (Hemiptera:Pentatomidae)	Applied Entomology and Zoology	49
長池卓男	2014	森林認証制度に関する研究動向と展望—特に森林の生物多様性保全に果たす役割に関して—	日本森林学会誌	96
浦口宏二(道総研)・飯島勇人ほか	2014	Demographic analyses of a fox population suffering from <i>Sarcoptic mange</i>	Journal of Wildlife Management	78
大津千晶・長池卓男ほか	2014	緑化施工後初期の法面における表面侵食の発生と周辺植生からの在来種の侵入・定着に影響を与える要因の解明	日本緑化工学会誌	40
飯島勇人・長池卓男	2015	Appropriate vegetation indices for measuring the impacts of deer on forest ecosystems	Ecological Indicators	48
飯島勇人・長池卓男	2015	Susceptible conditions for debarking by deer in subalpine coniferous forests in central Japan	Forest Ecosystems	2
本田 剛(総合農業技術センター)・飯島勇人	2016	Managing baldness of wildlife: an ethological approach to reducing crop damage	Population Ecology	58
長池卓男	2016	登山者はニホンジカの高山帯植生への影響をどのように見ているか?	保全生態学研究	21
飯島勇人	2016	生態学分野における状態空間モデルの利用: 趣旨説明	日本生態学会誌	66
飯島勇人	2016	シカ類の個体群動態の推定における状態空間モデルの有用性	日本生態学会誌	66
飯島勇人・大地純平	2016	ニホンジカの誘引に適した餌の検討	哺乳類科学	56
大津千晶・長池卓男ほか	2017	Evidence of extinction debt through the survival and colonization of each species in semi-natural grasslands	Journal of Vegetation Science	28
大津千晶	2017	生物多様性に配慮した地域版の緑化指針を作成するための研究プロセス—山梨県における事例—	日本緑化工学会誌	42
大澤正嗣	2017	Life cycle, ecological characteristics, and control of <i>Trachys yanoi</i> (Coleoptera:Buprestidae), an important pest of <i>Zelkova serrata</i>	Insects	8
飯島勇人(森林総研)・長池卓男	2017	The factors that determine the intensities of deer browsing and debarking on broadleaf tree around artificial grasslands	Journal of Forest Research	22
西川浩己	2018	シリーズ各都道府県の林業・林産業と遺伝育種の関わり(19) 山梨県	森林遺伝育種	7
長池卓男	2018	森林域の別荘地におけるカラマツの管理と課題	関東森林研究	69
大澤正嗣ほか	2019	Precipitation on abscised leaves modulates leaf-mining beetle ( <i>Trachys yanoi</i> ) survivorship and population dynamics	Ecological Entomology	44
長池卓男	2020	Effects of heavy, repeated bark stripping by <i>Cervus nippon</i> on survival of <i>Abies veitchii</i> in a subalpine coniferous forest in central Japan	Journal of Forestry Research	31
長池卓男	2020	Bark stripping by deer was more intensive on new recruits than on advanced regenerants in a subalpine forest	Forests	11
長池卓男	2020	The role of biodiversity concerns in regional and nationwide forest management plans of Japan -Do forest plans promote conservation?	Forest Policy and Economics	118
松下通也(林木育種セ)・西川浩己ほか	2020	Effects of light intensity and girdling treatments on the production of female cones in Japanese larch ( <i>Larix kaempferi</i> (Lamb.) Carr.): Implications for the management of seed orchards	Forests	11
長池卓男	2021	人工林における外来種植栽の現状と課題—針葉樹を中心に—	日本森林学会誌	103
飯島勇人(森林総研)・大澤正嗣ほか	2021	ニホンジカによる立木の剥皮発生に影響する要因の地域間での類似点と相違点—複数都県のデータを用いた検証—	日本森林学会誌	103
松下通也(林木育種セ)・西川浩己ほか	2022	Effects of girdling intensity, pruning season and thinning on tree growth, crown vigor and wound recovery in Japanese larch	Forests	13
林 耕太ほか	2022	Density estimation of non-independent unmarked animals from camera traps	Ecological Modelling	472
長池卓男	2023	Bark stripping by deer disturbs regeneration in a <i>Larix-Abies</i> subalpine forest	Forests	14
長池卓男	2023	Floristic homogenization and differentiation under deer grazing in a subalpine zone in central Japan	Diversity	15
大津千晶(千葉県中央博)・長池卓男ほか	2023	Responses to changes in precipitation of plant species vary by functional groups on understories of temperate forests in central Japan	Forest Ecology and Management	529
小澤雅之・伊原隆伸・櫻田尚人	2023	カラマツラミナとCLTの曲げ強度	関東森林研究	74
長池卓男	2023	マツ枯れ後のアカマツ二次林を構成する樹木へのニホンジカ剥皮の影響	関東森林研究	74
大津千晶(千葉県中央博)・長池卓男ほか	2023	Effects of topography and historical human disturbance on the current-day distribution of <i>Betula davurica</i> in a secondary deciduous forest in central Japan	Journal of Forest Research	28
大津千晶(千葉県中央博)・長池卓男ほか	2024	Positive effects of biomass of unpalatable neighborhoods on palatable plants in a grassland community under heavy grazing pressure by sika deer.	Grassland Science	70
長池卓男ほか	2025	Regeneration of subalpine conifer species is inhibited by bark-stripping deer in a <i>Betula</i> forest.	Arctic Antarctic and Alpine Research	57
中村誠宏(北大)・長池卓男・長谷川喬平ほか	2025	Physiological profiling of the soil microbe community using the EcoPlate and assessment of soil properties at 74 planted forest sites across Japan.	Ecological Research	40
長池卓男	2025	落葉広葉樹二次林における枯死木の動態	関東森林研究	76
林 耕太	2025	山梨県の亜高山帯針葉樹林におけるコマツガ稚樹へのニホンジカの摂食の影響	関東森林研究	76

## (2)学会等発表

発表者名	年	題名	雑誌名・学会名等	号など
戸沢一宏	2014	タケ資源の有効利用に関する研究	山梨県総合理工学研究会発表委員会	
戸沢一宏	2014	新しいバイオマーカーによる山梨県の有用植物等資源の探索と活用	山梨県総合理工学研究会発表委員会	
飯島勇人	2014	大雪による山梨県のニホンジカ個体群への影響	関中林試連生物被害情報の高度化に関する研究会	平成26年度
飯島勇人	2014	シカ個体数管理におけるFOSS4Gの活用	日本哺乳学会大会	2014年度
飯島勇人	2014	ニホンジカによる植生への影響を広く評価する	日本哺乳学会大会	2014年度
戸沢一宏	2014	夏季に収穫可能な特用林産物の栽培方法の確立	地域連携フォーラム研究成果発表会	
田中 裕	2014	高齢林も対象としたシステム収穫表の作成	関中林試連高齢林の林型および成立条件に関する研究会	平成26年度
田中 裕	2014	スギ、ヒノキ造林地に導入したタケの駆除に関する実証試験	関東森林学会大会	4
中村健一(東京都)・西川浩己ほか	2014	ミニチュア接木園における少花種ヒノキ品種の早期着花手法の検討	関東森林学会大会	4
長池卓男	2014	ニホンジカに剥皮されたシラベの成長と枯死	関東森林学会大会	4
飯島勇人	2014	Debarking of trees by deer are affected by deer density, tree size, species palatability, and maximum snow depth	IUFRO World Congress	
大澤正嗣	2014	Life cycle, survival rate in each stage, and control of an insect pest, <i>Trachys yanoi</i> (Buprestidae, Coleoptera)	IUFRO World Congress	
西川浩己・馬目善行ほか	2014	コンテナ栽培したヒノキ少花種品種接木木における種子生産性の向上	森林遺伝育種学会大会	3
西川浩己	2014	都市緑化に適した品種の開発	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	平成26年度
田中 裕	2014	人工造林地に導入したタケの駆除に関する実証試験	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	平成26年度
田中 裕	2014	群状伐採による森林造成方法の開発	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	平成26年度
戸沢一宏	2014	夏季に収穫可能な特用林産物の栽培方法の確立	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	平成26年度
三枝 茂	2014	高温乾燥による柱材の材面割れの削減方法	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	平成26年度
小澤雅之	2014	未利用木質バイオマスによるエネルギー用材化	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	平成26年度
長池卓男	2014	ニホンジカによる森林と高山帯への影響	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	平成26年度
大津千晶	2014	ニホンジカの影響を受けた半自然草原における植生遷移のモニタリング	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	平成26年度
飯島勇人	2014	ニホンジカの生態と管理技術	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	平成26年度
小澤雅之ほか	2015	合成木材の屋外耐久試験	京都大学DOL/LSF研究成果報告会	
飯島勇人	2015	ニホンジカの捕獲効率に影響を与える要因	日本生態学会大会	62
田中 裕	2015	伐採方法が異なる林床に植栽された落葉広葉樹の萌芽における窒素含有量	日本生態学会大会	62
大津千晶・長池卓男	2015	過去に炭焼きが行われた落葉広葉樹二次林における希少種ヤエガワカンパの分布	日本生態学会大会	62
大澤正嗣	2015	ケヤキの害虫、ヤノナミガタチタマシの生活史と各ステージの生存率	日本生態学会大会	62
長池卓男	2015	ニホンジカの摂食が高山帯植生の均質化に及ぼす影響	日本生態学会大会	62
飯島勇人	2015	捕獲圧はニホンジカによる天然林の植生への影響を低減するか?	日本森林学会大会	126
田中 裕	2015	落葉広葉樹におけるT/R率および飽和光合成速度の被陰応答	日本森林学会大会	126
大地純平	2015	市販資材を用いた簡易園い園によるニホンジカ誘引誘捕方法の開発	日本森林学会大会	126
大澤正嗣	2015	ヤノナミガタチタマシの薬剤による防除	日本森林学会大会	126
長池卓男・飯島勇人・大津千晶・大地純平	2015	地方公設試験場でのニホンジカ対策に関する研究戦略の検討-SWOT分析による山梨県森林総合研究所における実行-	日本森林学会大会	126
本多琢己	2015	API樹種の接着性に及ぼす架橋剤の影響	日本木材学会大会	64
飯島勇人	2015	The importance of utilization of multiple data sources for estimating deer population dynamics	国際野生動物管理会議	
長池卓男・飯島勇人	2015	Effects of sika deer ( <i>Carvus nippon</i> ) on alpine zone and countermeasures in Minami-alps National Park, Central Japan	国際野生動物管理会議	
西川浩己・柴田 尚	2015	ヒノキ花輪症対策菌の生産について	やまなし産学官連携研究交流事業研究成果発表会	平成27年度
本多琢己	2015	構造用製材の効率的な品質管理技術	やまなし産学官連携研究交流事業研究成果発表会	平成27年度
飯島勇人	2015	簡易調査法によるニホンジカの影響把握	関中林試連生物被害情報の高度化に関する研究会	平成27年度

山梨県森林総合研究所研究報告 No.45 (2026)

発表者名	年	題名	雑誌名・学会名等	号など
田中 裕	2015	帯状採採地に樹下植栽された落葉広葉樹3種の生育状況	関中林試連森林の更新技術に関する研究会	平成27年度
田中 裕	2015	甲府市有林伝文沢における水源涵養機能	関中林試連森林の更新技術に関する研究会	平成27年度
三枝 茂・鈴木泰仁	2015	山梨県産スギ材から製造したCLTラミナの材質	日本木材加工技術協会年次大会	33
田中 裕	2015	ニホンジカ防除柵内外に樹下植栽された落葉広葉樹3種の生育比較	関東森林学会大会	5
長池卓男・大津千晶	2015	クマ割ぎ防除資材によるニホンジカ剥皮防除への適用試験	関東森林学会大会	5
大澤正嗣	2015	富士山で発生したトウヒツヅリヒメハマキの個体数変動	樹木医学会大会	20
西川浩己	2015	ヒノキ花粉症対策種苗の生産手法の確立	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	平成27年度
飯島勇人	2015	ニホンジカの森林生態系に及ぼす影響と適切な管理方法の開発	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	平成27年度
大津千晶	2015	治山林業事業における生物多様性に配慮した緑化工指針の作成	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	平成27年度
本多琢己	2015	針葉樹構造用製材の効率的な品質管理技術の開発	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	平成27年度
大地純平	2015	森林GISの効率運用に向けた習熟構築型GISのデータベース構築と経路解析手法の開発	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	平成27年度
柴田 尚	2015	さのこ研究の「これまで」、「これから」一貫培きのこを中心として	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	平成27年度
戸沢一宏	2015	植物を食べる、使う	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	平成27年度
小澤雅之ほか	2016	合成木材の屋外耐久試験	京都大学DOL/LSF研究成果報告会	
大地純平	2016	市販資材を用いた簡易回い置による誘引捕獲方法の開発	日本森林学会大会	127
西川浩己・馬目恭行	2016	根域抑制したヒノキ少花樹品種採種木における種子生産について	日本森林学会大会	127
田中 裕	2016	落葉広葉樹の被除応答における葉の厚さと光合成速度のトレードオフ	日本森林学会大会	127
飯島勇人	2016	被除の密度指標を用いたベイズ型状態空間モデルによるシカの個体群動態の推定	日本森林学会大会	127
飯島勇人・長池卓男	2016	植栽広葉樹へのニホンジカの摂食強度に影響する要因	日本森林学会大会	127
長池卓男	2016	地域森林計画における生物多様性の位置づけ	日本森林学会大会	127
飯島勇人ほか	2016	発見率を考慮したヒメボタルの発生消長動態解析	日本生態学会大会	63
長池卓男	2016	「環境保全型林業:保残伐施業の日本における展開に向けて」コメント	日本生態学会大会	63
大津千晶・長池卓男	2016	シカの影響を受けた草原群落における植生保護柵の設置年の違いが群落の回復プロセスに与える影響	日本生態学会大会	63
小澤雅之	2016	除濕空気によるバイオマスガス化用チップ材の乾燥	日本木材学会大会	66
戸沢一宏	2016	アラゲククラグの悪木栽培について	関中林試連のこ栽培技術研究会	平成28年度
田中 裕	2016	帯状採採地に樹下植栽した落葉広葉樹3種の成長	関中林試連森林の更新技術に関する研究会	平成28年度
飯島勇人	2016	個体数推定法の歴史とベイズモデルの実装例	日本哺乳類学会大会企画シンポジウム	2016年度
飯島勇人	2016	シカ管理目標の設定状況と課題	日本哺乳類学会大会自由集會	2016年度
大澤正嗣	2016	カツラマルカイガラムシの山林における大発生	農林害虫防除研究会講演要旨集	21
田中 裕	2016	花崗岩マサを母材とする山地における土壌特性と土壌浸透能および土壌貯水能の関係	関東森林学会大会	6
長池卓男・飯島勇人	2016	Upward distribution of subalpine conifer trees in dwarf <i>Betula ermanii</i> forests was inhibited by deer debarking	国際森林林業試験研究機関連合アジア/オセアニア会議	
西川浩己ほか	2016	カラマツ採種圃における受光性による後生枝の発生について	森林遺伝育種学会大会	5
田中 裕	2016	人工造林による広葉樹の更新:維持性と植栽適地	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	平成28年度
長池卓男	2016	広葉樹の天然更新:実現可能性と課題	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	平成28年度
山梨県森林総合研究所	2017	山梨県におけるカラマツの資源量と試験研究	森林総合研究所公開シンポジウム「カラマツとカラマツ研究のこれから—カラマツ資源の持続的利用に向けて—」	
田中 裕	2017	落葉広葉樹における樹葉の光量求度と被除下での個体成長の整合性	日本森林学会大会	128
大地純平	2017	野生動物による竹林の利用状況について	日本森林学会大会	128
生方正俊(林木育種セ)・西川浩己ほか	2017	カラマツ種子の成熟時期の植栽地間変異	日本森林学会大会	128
長池卓男	2017	森林公園における生態系サービスのトレードオフ-景観と希少種保全に関するアンケート調査-	日本森林学会大会	128

発表者名	年	題名	雑誌名・学会名等	号など
本多琢己	2017	乾熱処理によるフェノール樹脂含浸強化LVLの破壊じん性の変化	日本木材学会大会	67
長池卓男	2017	Mt. Fuji reforestation project -Corporate social responsibility on ecological forest restoration in conifer plantations in Japan	International Conference on Forest Landscape Restoration under Global Change	
西川浩己	2017	山梨県におけるカラマツ種子・苗木生産の取り組みについて	関中林試連優良種苗研究会	
長池卓男	2017	Restoration processes at line cutting sites in an even-aged plantation, Mt. Fuji, central Japan	3rd Restoring Forests: Regeneration and Ecosystem Function for the Future	
秋庭満輝(森林総研)・大澤正嗣ほか	2017	日本におけるニセマツノザイセンチュウ2亜種の存在	日本昆虫学会大会	2017年度
長池卓男	2017	カラマツが植栽されている別荘地におけるカラマツ植栽木の管理	関東森林学会大会	7
三枝 茂	2017	山梨県産スギCLTラミナの品質	やまなし産学官連携研究交流事業	
西川浩己・神戸陽一・小林正男・羽田直美・三浦 充・渡辺真紀子ほか	2017	環状剥皮したカラマツ採種木の着花促進について	森林遺伝育種学会大会	6
松下通也(林木育種セ)・西川浩己ほか	2017	明るさ等の採種圃環境に対するカラマツの着果性のクローン間変異	森林遺伝育種学会大会	6
大澤正嗣・長谷川 文	2017	山梨県におけるマツノダグラミキリの発生予察	樹木医学会大会	22
生方正俊(林木育種セ)・西川浩己ほか	2018	カラマツ種子の成熟時期の播種地間および年次間変異	日本森林学会大会	129
長池卓男	2018	森林管理における気候変動適応策の検討	日本森林学会大会	129
長池卓男	2018	ニホンジカに剥皮された蒸気山等針葉樹はいつ枯死するか?	日本生態学会大会	65
本多琢己	2018	スギ正角材の高品質エレメント化に関する研究	日本木材学会大会	68
小澤雅之	2018	針葉樹新材の長期屋外乾燥と品質	日本木材学会大会	68
西川浩己	2018	環状剥皮したカラマツ採種木の着果促進について	関中林試連優良種苗研究会	
三枝 茂	2018	免匠性を高めた木製内装材の開発	やまなし産学官連携交流事業	
小澤雅之	2018	バイオマス熱ボイラのチップ含水率について	関東森林学会大会	8
長池卓男ほか	2018	帯状採種地に植栽された落葉広葉樹5種の成長に及ぼす影響	関東森林学会大会	3
戸沢一宏	2018	カンゾウの栽培方法に関する研究	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	平成29年度
指村奈穂子	2018	レンゲツツジなどにより構成される半自然草原群落の保全管理手法の検討-甘利山における事例研究	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	平成29年度
大地純平	2018	放棄竹林を利用したイノシシ・ニホンジカの誘導・捕獲に関する研究	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	平成29年度
大地純平	2018	ニホンジカの新しい捕獲技術の適用性試験と改良	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	平成29年度
小澤雅之	2018	木質燃料の品質等に関する課題の解決	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	平成29年度
三枝 茂	2018	山梨県産スギ材から製造したCLTラミナの材質特性の解明	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	平成29年度
西川浩己	2018	カラマツ種苗の安定供給のための技術開発	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	平成29年度
西川浩己	2019	カラマツコンテナ苗の生産手法の確立	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	平成30年度
長池卓男	2019	持続的な生態的森林管理における希少種管理支援ツールの開発	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	平成30年度
長池卓男	2019	森林公園や別荘地における保健休養機能の向上に資する森林整備に関する研究	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	平成30年度
本多琢己	2019	山梨県産スギ正角材の強度性能評価	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	平成30年度
大地純平	2019	現場ニーズに対応した新たな森林GIS基盤データ主題図の作成手法開発	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	平成30年度
西川浩己	2019	カラマツ光処理による着花促進技術の開発	地域戦略プロジェクト成果発表会「カラマツ種苗の安定的生産に向けた技術開発」	
大地純平	2019	山梨県におけるヒノキコンテナ苗の植栽季節別生存率	日本森林学会大会	130
長池卓男	2019	人工林における気候変動適応策の研究動向	日本森林学会大会	130
廣瀬 満ほか	2019	山梨県環境山山麓のカラマツ林斜面における表面径の評価	日本森林学会大会	130
西川浩己・小林正男・羽田直美・三浦 充・渡辺真紀子ほか	2019	環状剥皮したカラマツ採種木の着果促進効果の継続性について	日本森林学会大会	130
田村 明(林木育種セ)・西川浩己ほか	2019	物理的剥皮処理によるカラマツ短枝芽における炭素・窒素動態	日本森林学会大会	130
生方正俊(林木育種セ)・西川浩己ほか	2019	カラマツ種子の最適な採取時期	日本森林学会大会	130
長池卓男	2019	ニホンジカの摂食の影響による蒸気山等樹生の均質化	日本生態学会大会	66

## 山梨県森林総合研究所研究報告 No.45 (2026)

発表者名	年	題名	雑誌名・学会名等	号など
小澤雅之・伊原隆伸ほか	2019	バイオマス熱ボイル用チップの天然乾燥における含水率変化	日本木材学会大会	69
本多琢己	2019	強化LVLの靱性の改良開発	日本木材学会大会	69
長池卓男ほか	2019	Debarking by sika deer simplified tree species diversity, rather stand structure, in an <i>Abies</i> -broadleaved forest in central Japan	IUFRO Abies 2019	2019
三枝 茂	2019	山梨県産スギおよびカラマツから製造したCLTの強度性能	やまなし産学官連携研究交流事業研究成果発表会	
長池卓男・廣瀬 満・荒川史子・末木 文・長谷川喬平	2019	奥秩父山地亜高山帯針葉樹林におけるニホンジカの剥皮の状況	関東森林学会大会	9
小澤雅之	2019	異なる乾燥条件下でのスギ柱材における表面および内部割れの発生について	関東森林学会大会	9
田中 裕	2019	落葉広葉樹における生育場所の相対光強度とN値およびSPAD値の関係	関東森林学会大会	9
大澤正嗣	2019	中国四川省における松材線虫病の被害の拡大と対策の検討	樹木医学会大会	24
西川浩己	2020	希少植物等の遺伝資源の増殖・保存技術の確立	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	令和元年度
大澤正嗣	2020	四川省における松くい虫被害の現状と今後の被害対策	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	令和元年度
本多琢己	2020	県産材を有効利用した木質材料	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	令和元年度
戸沢一宏	2020	短木を利用したきのこ省コスト栽培技術の確立	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	令和元年度
長池卓男	2020	ニホンジカに関するモニタリングの効率化・高精度化に関する研究	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	令和元年度
大地純平	2020	林業用架橋システム(集材機)の近代化に関する研究開発	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	令和元年度
三枝 茂	2020	山梨県産スギ材及びカラマツ材を利用したCLTの基礎的製造技術の確立	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	令和元年度
三枝 茂	2020	山梨県産カラマツ調湿材の強度特性に関する研究-地域別のカラマツの林分構造と材質特性の解明-	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	令和元年度
大澤正嗣ほか	2020	落葉性害虫ヤノミガタチピタマシへのケヤキ早期落葉の効果	日本生態学会大会	67
長池卓男	2020	ニホンジカの剥皮に至る高山帯針葉樹林の更新時期が及ぼす影響	日本生態学会大会	67
小澤雅之・伊原隆伸ほか	2020	バイオマス熱ボイル用チップの天然乾燥における含水率変化(第二報)	日本木材学会大会	70
本多琢己	2020	山梨県産スギ平角材の強度性能評価	日本木材学会大会	70
廣瀬 満ほか	2020	カラマツ人工林と広葉樹林での浸透能の比較	日本森林学会大会	131
長池卓男	2020	外来種植栽人工林の現状と課題	日本森林学会大会	131
長谷川喬平・田中 裕ほか	2020	下刈り期間が短縮されたヒノキ・カラマツ植栽木の5年後の成長	日本森林学会大会	131
大地純平	2020	熱赤外線カメラ搭載UAVを用いた雪山遭難者の視認性試験	日本森林学会大会	131
小澤雅之・伊原隆伸・櫻田尚人	2020	異なる乾燥条件下におけるスギ柱材の乾燥割れ	関東森林学会大会	10
長池卓男・荒川史子	2020	企業の環境パフォーマンス指標と森林認証紙使用の関係	関東森林学会大会	10
大津千晶(千葉農中央博)・長池卓男ほか	2020	山火事停止後の落葉広葉樹林内において人為的擾乱がヤエガワ カンパ <i>Betula davurica</i> の分布に与えた影響	植生学会大会	25
大澤正嗣	2021	ケヤキの害虫(ヤノミガタチピタマシ)の被害、生態、防除	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	令和2年度
長谷川喬平	2021	育林省力化のための低コスト下刈り方法の開発	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	令和2年度
長池卓男	2021	指葉林の透視調査と広葉樹の種特性解明に基づく広葉樹林植栽技術指針の作成	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	令和2年度
大地純平	2021	一貫作業システム導入に向けた段階的試験研究-ヒノキコンテナ苗植栽試験-	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	令和2年度
小澤雅之	2021	木材乾燥における高温処理条件の検討	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	令和2年度
小澤雅之	2021	未利用材の安定供給化によるバイオマスエネルギーの利用促進	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	令和2年度
大澤正嗣	2021	山梨県と四国省との間で「森林分野における交流」最終報告	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	令和2年度
廣瀬 満ほか	2021	両端山山麓の森林斜面における土壌侵食の実態と要因について	日本森林学会大会	132
林 耕太・長池卓男・大地純平ほか	2021	マーケティング分析手法を用いたニホンジカ研究戦略の整理の検討	日本森林学会大会	132
長池卓男・長谷川喬平	2021	ヒノキ・カラマツ混交植栽人工林における林分構造	日本森林学会大会	132
大地純平	2021	ワークスルー式3Dレーザ計測機を用いた森林計測の検証	日本森林学会大会	132
小澤雅之・伊原隆伸・櫻田尚人	2021	バイオマス熱ボイル用チップの天然乾燥における含水率変化(第三報)	日本木材学会大会	71

発表者名	年	題名	雑誌名・学会名等	号など
長池卓男ほか	2021	ニホンジカの剥皮がウラジロモミ-落葉広葉樹林構成種の生残に及ぼす影響	日本生態学会大会	68
大澤正嗣	2021	潜葉性害虫ヤノミガタチヒタマシの発生とケヤキ早期落葉時期の関係について	日本生態学会大会	68
大澤正嗣	2021	カラマツ根株心腐病について	日本森林学会大会樹木病害研究会	132
小澤雅之・伊原隆伸・櫻田尚人	2021	カラマツ丸太における動的ヤング率と樹幹内での分布	関東森林学会	11
田村 明(林木育種セ)・西川浩己ほか	2021	ヒノキミニチュア採種圃の管理技術の開発において	森林遺伝育種学会大会	10
長池卓男	2022	混交複層状態の人工林における間伐指針の検討	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	令和3年度
大地純平	2022	造林地侵入防止柵を活用したニホンジカ捕獲の効率化に関する研究	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	令和3年度
廣瀬 満	2022	カラマツ人工林における水源涵養機能を強化するための森林管理手法の確立	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	令和3年度
戸沢一宏	2022	竹林を利用したきのこ栽培技術の確立	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	令和3年度
廣瀬 満	2022	森林整備後の土砂流出量の変化について	日本森林学会大会	133
大澤正嗣・長谷川喬平・望月邦良	2022	山梨県におけるカシノナガキクイムシ捕獲域とナラ枯れ発生域の拡大について	日本森林学会大会	133
西川浩己・馬目恭行・小林正男・羽田直美・三浦 充・渡辺真紀子ほか	2022	ヒノキ少花粉品種採種圃における根域抑制栽培による着花促進について	日本森林学会大会	133
長池卓男	2022	ミズナラ二次林とカラマツ人工林におけるスズメクサ枯死後の土壌浸食	日本森林学会大会	133
木村 恵(林木育種セ)・西川浩己ほか	2022	ヒノキ球果の採取適期の探索	日本森林学会大会	133
長池卓男	2022	ダケカンバ林に生育する常緑針葉樹はニホンジカに集中的に剥皮されているか?	日本生態学会大会	69
小澤雅之・伊原隆伸・櫻田尚人	2022	バイオマス熱ボイラへ投入するチップ含水率と炉への影響	日本木材学会大会	72
西川浩己	2022	カラマツの既存採種圃の再生への取り組み(受光伐処理、樹型誘導処理)	関東地区特定母樹等普及促進会議	令和4年度
林 耕太ほか	2022	ランダムエンカウンターモデル(REM)による群れ集団の個体密度推定	日本哺乳類学会大会	2022年度
西川浩己	2022	ヒノキ少花粉品種採種圃の根域抑制栽培による着花促進について	関中林試速優良種苗の普及に向けた高品質化研究会	3
小澤雅之・伊原隆伸・櫻田尚人	2022	カラマツラミナとCLTの曲げ強度について	関東森林学会大会	12
戸沢一宏	2023	特用林産(山菜・薬草・炭)の研究を振り返る	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	令和4年度
西川浩己	2023	さし木によるカラマツ苗の増殖技術の開発	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	令和4年度
戸沢一宏	2023	低コスト更新技術の開発に関する研究	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	令和4年度
長池卓男	2023	森林下層植生が土砂流出防止および水源涵養機能に及ぼす影響と植生回復に関する研究	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	令和4年度
三枝 茂	2023	山梨県産ヒノキの強度性能の解明	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	令和4年度
三枝 茂	2023	スギ大径丸太の簡易強度選別手法の開発	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	令和4年度
小澤雅之	2023	カラマツ材によるCLT(直交集成板)の優位性の提示	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	令和4年度
長池卓男・玉田勝也・長谷川喬平・林 耕太・廣瀬 満	2023	富士山亜高山帯針葉樹林の森林動態に及ぼすニホンジカ剥皮の影響	日本森林学会大会	134
林 耕太	2023	林内での局所空間内のニホンジカの土地利用	日本森林学会大会	134
廣瀬 満	2023	高齢級カラマツ人工林の樹冠遮断について	日本森林学会大会	134
玉田勝也	2023	播種工施工後初期の法面の緑化成績に影響を与える要因	日本森林学会大会	134
中田知沙(森林総研)・日下 慶・武居正道ほか	2023	フォワード集材における作業員の労働負担	日本森林学会大会	134
大地純平	2023	UAVを用いた下草刈り作業地の作業確認	日本森林学会大会	134
長池卓男	2023	南アルプス亜高山帯植生の12年間の変化に及ぼすニホンジカの影響	日本生態学会大会	70
小澤雅之・長谷川喬平・三浦 充ほか	2023	カシノナガキクイムシ被害材チップによるバイオマス熱ボイラでの燃焼試験	日本木材学会大会	73
林 耕太	2023	カメラトラップによるタイムラプス撮影とセンサー検出による密度推定の比較	日本哺乳類学会大会	2023年度
長池卓男	2023	Effects of bark stripping by sika deer on forest stand dynamics with elevational gradient in subalpine mixed forests, central Japan	IUFRO Conference Uneven-aged silviculture	
松下通也(林木育種セ)・西川浩己ほか	2023	カラマツ採種圃における母樹の成長と樹勢に対する環状剥皮、剪定時期および間伐の効果	森林遺伝育種学会大会	12
木村 恵(林木育種セ)・西川浩己ほか	2023	ヒノキにおける採取適期の検証と球果成長に及ぼす積算温度の影響	森林遺伝育種学会大会	12

山梨県森林総合研究所研究報告 No.45 (2026)

発表者名	年	題名	雑誌名・学会名等	号など
戸沢一宏	2024	新たななきご苗床栽培方法の確立	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	令和5年度
林 精太	2024	トリュフ栽培に適した森林環境に関する研究	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	令和5年度
長谷川喬平	2024	高齢級人工林の適切な管理技術に関する研究	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	令和5年度
長池卓男	2024	山梨県におけるコウヨウゼンの植栽可能性に関する研究	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	令和5年度
林 精太	2024	ニホンジカによる鉄道衝突事故の要因解明と対策に関する研究	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	令和5年度
小澤雅之	2024	カンノナガキクイムシ被害木の有効利用に関する研究	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	令和5年度
三枝 茂	2024	県産構造用製材品の品質管理基準に関する研究	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	令和5年度
西川浩己・馬目恭行・保坂由美	2024	ヒノキ少花輪品種採種木における根域抑制栽培による着花促進について	日本森林学会大会	135
長池卓男	2024	シラビノ人工林帯伏採地に植栽された広葉樹の成長	日本森林学会大会	135
林 精太	2024	河川敷がニホンジカの生活圏に重要な役割を果たしている	日本森林学会大会	135
長谷川喬平・長池卓男・望月邦良	2024	山梨県におけるスギの高成長成帯の修正	日本森林学会大会	135
玉田勝也	2024	刈払機の駆動力源の違いが、造林地における下刈の作業負担に及ぼす影響	日本森林学会大会	135
伊原種伸・小澤雅之	2024	カンノナガキクイムシ被害材による大人向け木工作キットの製作	日本木材学会大会	74
長池卓男	2024	Current situation and future issues of forest-related work by persons with disabilities in Japan	IUFRO World Congress	
長池卓男	2024	Restoration from even-aged conifer plantation toward mixed forest by planting broad-leaved tree of line cutting sites in Mt. Fuji, central Japan	IUFRO World Congress	
林 精太	2024	カメラトラップ画像を用いた個体数推定	日本哺乳類学会大会	2024年度
林 精太	2024	ニホンジカ列車衝突事故の発生要因の解明	日本哺乳類学会大会	2024年度
大澤千晶(東大)・玉田勝也・長池卓男ほか	2024	ニホンジカの影響により衰退した半自然草原における植生保護網の設置期間の長期化が準原生植物の生育状況に与える影響	植生学会大会	29
小澤雅之ほか	2024	林業従事者の労働負荷について	関東森林学会大会	14
長池卓男	2024	落葉広葉樹二次林における枯死木の動態	関東森林学会大会	14
林 精太	2024	山梨県の亞高山帯におけるコマツガ稚樹へのニホンジカの摂食の影響	関東森林学会大会	14
三枝 茂	2025	木材加工乾燥強度の試験研究業務を振り返って	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	令和6年度
長谷川喬平	2025	カンノナガキクイムシの被害拡大に及ぼす因子に関する研究	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	令和6年度
長池卓男	2025	針広混交林化のための間伐手法に関する研究	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	令和6年度
大地純平	2025	UAV, ICT機器を活用した森林整備事業の業務効率化	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	令和6年度
大地純平	2025	産業用マルチコプターを用いたマツクイムシ防除等の検討	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	令和6年度
小澤雅之	2025	農村生産性向上に着目した工程管理手法の検討	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	令和6年度
戸沢一宏	2025	デジタル木材検査システム検証試験	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	令和6年度
戸沢一宏	2025	森林空間を利用した山菜等栽培方法に関する研究	山梨県森林総合研究所研究成果発表会	令和6年度
長池卓男	2025	落葉広葉樹二次林における階層別植物種組成の経時変化	日本森林学会大会	136
林 精太・長池卓男	2025	亞高山帯針葉樹林でのニホンジカの剥皮の進行	日本森林学会大会	136
長谷川喬平・大澤正嗣・望月邦良	2025	カンノナガキクイムシが越冬可能な標高の調査-山梨県の事例-	日本森林学会大会	136
高柳達志・望月邦良・大澤正嗣	2025	カンノナガキクイムシの根株からの脱出経路-甲府盆地の事例-	日本森林学会大会	136
大澤正嗣・高柳達志	2025	早期落葉が潜葉性害虫に与える影響-もし早期落葉しなかったら-	日本森林学会大会	136
大地純平	2025	下刈り作業の機械化に向けた研究	日本森林学会大会	136
小澤雅之・伊原種伸・櫻田尚人	2025	カンノナガキクイムシ被害材における被害分布とピロディン値	日本木材学会大会	75
長池卓男	2025	シカがいるところでの主伐を考える	森林施業研究会シンポジウム	25

(3) 森研情報

発表者名	年	題名	雑誌名・学会名等	号など
長池卓男	2016	創立80周年を迎えて	森研情報	43
西川浩己	2016	ヒノキ花粉症対策種苗の生産手法の確立	森研情報	43
飯島勇人	2016	ニホンジカの森林生態系に及ぼす影響と適切な管理方法の開発	森研情報	43
大津千晶	2016	種子をなるべく持ち込まずに緑化するには?	森研情報	43
本多琢己	2016	製材品の効率的な品質管理	森研情報	43
大地純平	2016	森林GISの効率運用に向けた部課横断型GISのDB構築と経路解析手法の開発	森研情報	43
柘植賢二	2016	人材育成の新たな体制作りを目指した取り組みについて	森研情報	43
田中 裕	2017	部分笹伐と落葉広葉樹苗木の植栽による針広混交林造成技術指針の作成	森研情報	46
長池卓男	2017	ニホンジカが多い針葉樹人工林を針広混交林へ転換するには	森研情報	44
長池卓男	2017	高山帯に登るニホンジカに困っています	森研情報	46
大澤正嗣	2017	カンノナガキクイムシが山梨県で捕獲されました	森研情報	44
三枝 茂	2017	NCルーターでの仕上げ切削について	森研情報	46
小峰正之	2017	様々な研修を実施しています	森研情報	44
三枝 茂	2018	県産スギCLTラミナの強度について	森研情報	45
長池卓男	2018	ニホンジカを効率よく捕獲するための新たな試み	森研情報	45
指村奈穂子	2018	レンゲツツジ咲く草原を保全するために	森研情報	45
三枝 茂	2018	県産スギ厚板の造作材としての品質	森研情報	45
小澤雅之	2018	木質燃料の品質等に関する課題の解決	森研情報	45
大地純平	2018	設置竹林を利用したニホンジカ・イノシシの誘導・捕獲	森研情報	45
戸沢一宏	2018	カンゾウの栽培方法	森研情報	45
小峰正之	2018	新しい業務管理システムのご紹介	森研情報	45
三枝 茂	2019	実用性の接合部を曲線化して意匠性を高めた木製内装材の開発	森研情報	46
西川浩己	2019	カラマツコンテナ苗の生産方法の開発	森研情報	46
長池卓男	2019	希少種を守りながら森林を管理するために	森研情報	46
長池卓男	2019	別荘地で森林の保健休養機能を高めるには	森研情報	46
大地純平	2019	現場ニーズに対応した新たな森林GIS基盤データ・主題図の作成手法開発	森研情報	46
本多琢己	2019	県産スギ平角材の強度性能を明らかにする	森研情報	46
廣瀬 満	2019	カラマツ林では水がどのように循環しているのか?	森研情報	46
小峰正之	2019	新規林業就業者へ技能習得を支援しています	森研情報	46
三枝 茂	2020	山梨県産カラマツの地域別強度特性	森研情報	47
西川浩己	2020	希少植物等の遺伝資源の増殖・保存技術の開発	森研情報	47
戸沢一宏	2020	短木を利用したきのこ省力化栽培技術の確立	森研情報	47
長池卓男	2020	ニホンジカの数をどのように調べる?	森研情報	47
大地純平	2020	林業用架線システム(集材機)の近代化に関する研究開発	森研情報	47
三枝 茂	2020	山梨県産スギおよびカラマツから製造したCLTの強度性能	森研情報	47
長谷川壽平	2020	下刈作業の省力化を目指して	森研情報	47
小峰正之	2020	自走式下刈機普及の取り組みについて	森研情報	47
大澤正嗣	2021	沼薬性害虫ヤノミガタチピタマシの生態と対策	森研情報	48
長谷川壽平	2021	下刈りコスト削減に向けての試験	森研情報	48
長池卓男	2021	落葉広葉樹の森を造るために	森研情報	48
大地純平	2021	一貫作業システム導入に向けて -ヒノキコンテナ苗植栽試験-	森研情報	48
小澤雅之	2021	木材を乾燥する一柱材編	森研情報	48
小澤雅之	2021	木材を乾燥するチップ編	森研情報	48
廣瀬 満	2022	カラマツ人工林の水渾濁改善機能	森研情報	49
大地純平	2022	新植地における野生動物被害とその対策	森研情報	49
長池卓男	2022	複数の樹種を植えた人工林は材積が増える?	森研情報	49
戸沢一宏	2022	キヌガサタケの栽培	森研情報	49
三枝 茂	2023	スギ大径丸太の簡易強度選別方法	森研情報	50
三枝 茂	2023	山梨県産ヒノキの強度特性	森研情報	50
長池卓男	2023	スズタケが枯れた影響は?	森研情報	50
長池卓男	2024	気候変動と森林とニホンジカと	森研情報	51
小澤雅之	2024	カンノナガキクイムシ被害材の有効利用について	森研情報	51
西川浩己	2024	カラマツの幹に傷をつけて結果を促進する	森研情報	51
大地純平	2025	ラジコン集材機による下刈り作業の労働負荷軽減と効率化	森研情報	52
戸沢一宏	2025	伐倒した木材のデジタル測定	森研情報	52
西川浩己	2025	少花樹ヒノキ種子の増産を目指して	森研情報	52

## (4) 専門誌

発表者名	年	題名	雑誌名・学会名等	号など
長池卓男	2014	新たな人工林のあり方を目指して	林研賞NEWS	Vol.1
飯島勇人・長池卓男	2014	南アルプス国立公園の至高山帯針葉樹林におけるニホンジカの影響	日本高山植物保護協会報	74
田中 裕	2014	実証試験に基づくタケの除去方法について	林業やまなし	206
柘植賢二	2014	トラクターの油圧動力を利用した集材機の開発	林業やまなし	207
大澤正嗣	2014	富士山の甲虫 ―その概況及びシラビソ林の地中から発生する甲虫類―	昆虫と自然	7
飯島勇人	2015	山梨・2014年の記録的な大雪がシカに与えた影響	自然保護	543
長池卓男・大津千晶・飯島勇人	2015	ニホンジカに影響された半自然草原における植生復元	公立林業試験研究機関 研究成果選集	12
飯島勇人	2015	山梨県のシカ管理に関わって思うこと	森林科学	73
飯島勇人	2015	ニホンジカ管理に必要な3つの管理と試験研究	林業やまなし	208
戸沢一宏	2015	夏でも栽培できるキノコ「クワフビタケ」	林業やまなし	208
大津千晶	2015	生物多様性に配慮した緑化工指針案の作成	林業やまなし	209
小澤雅之	2015	未利用木質バイオマスによるエネルギー用材化	関中林試連情報	39
田中 裕	2015	ヒノキにおける林齢と光合成能力の関係	関中林試連高樹林の林型および成立条件に関する研究会報告書	
田中 裕	2015	高齢林も対象とした山梨県版システム収獲表の作成	関中林試連高樹林の林型および成立条件に関する研究会報告書	
西川浩己・馬目恭行	2015	コンテナ接種木を用いた移動式採種圃の造成技術の確立	関中林試連花粉症対策研究会成果集	
大澤正嗣	2015	カラマツ根株心腐病への対策指針	現代林業	586
飯島勇人	2015	ニホンジカの森林生態系に及ぼす影響と適切な管理手法の開発	現代林業	592
長池卓男	2015	山梨県森林総合研究所創立80周年を迎えて	林業やまなし	210
戸沢一宏	2015	竹チップを利用したきのこの苗木栽培	林業やまなし	210
長池卓男・田中 裕・飯島勇人	2015	針葉樹人工林に広葉樹を生やすには?	やまなし林業普及通信	49
小澤雅之	2015	未利用材は立派なエネルギー資源	やまなし林業普及通信	50
指村宗穂子・大津千晶・長池卓男	2017	レンゲツツジ改く草原を保全するために	やまなし林業普及通信	51
大澤正嗣	2016	亜高山帯針葉樹林の害虫、トウヒツリヒメハマキ ( <i>Epinotia piceae</i> (issiki)) の個体群密度の変動	森林防疫	65
長池卓男	2016	シンボジュウム「南アルプス高山帯のニホンジカどうつきあうか」を開催して	日本高山植物保護協会報	79
長池卓男・大津千晶・飯島勇人	2014	ニホンジカの影響を受けた山梨県御形山の半自然草原における植生復元	水利科学	347
長池卓男	2016	山梨県森林総合研究所は樹立80周年を迎えました	関中林試連情報	40
本多塚己	2016	構造用製材の効率的な品質管理技術	関中林試連情報	40
飯島勇人ほか	2016	森林におけるシカ問題を解決するための知見の集積	森林技術	890
大澤正嗣	2016	カラマツ根株心腐病の被害軽減対策	林業やまなし	211
田中 裕	2016	「針広混交林造成のための技術指針」を作成しました	林業やまなし	212
大地純平	2016	「UAV(無人航空機)」を用いた森林調査とその可能性	林業やまなし	213
田中 裕	2016	針広混交林造成のための技術指針(針葉樹人工林の針広混交林への誘導)	林業普及情報活動システム化リーフレット	平成27年度
長池卓男・飯島勇人・田中 裕	2016	山梨県における針葉樹人工林の針広混交林・広葉樹林化事例集		2016年7月版
長池卓男ほか	2017	アメリカ合衆国ベンシムルニア州でのオゾロジカ管理に学ぶ―複数の主体の協働による順応的シカ管理―	森林科学	79
飯島勇人	2017	シカの個体数推定法の変遷と課題	森林科学	79
長池卓男	2017	ニホンジカが多い場所での針葉樹人工林を針広混交林化するには?	林業やまなし	214
大地純平	2017	市販資材を用いた、簡易型い草によるニホンジカ誘引捕獲方法の開発	現代林業	617
大澤正嗣	2017	森林業やまなしの森に関する研究所―山梨県森林総合研究所―	林業やまなし	216

発表者名	年	題名	雑誌名・学会名等	号など
小澤雅之	2017	吹けば飛ぶよな木材の粒に…	林業やまなし	216
西川浩己	2018	ヒノキ花粉症対策種苗の生産手法の開発	林業やまなし	217
大地純平	2018	タブレット端末をもって森に行こう!	林業やまなし	218
小峰正之	2018	山梨県森林総合研究所で実施している研修について	林業やまなし	218
本多琢己	2018	構造用製材の効率的な品質管理技術Ⅱ	やまなし林業普及通信	52
小澤雅之	2018	木質ペレットと薪の品質	やまなし林業普及通信	53
大地純平	2018	タケノコを野生動物の被害から守る	やまなし林業普及通信	54
長池卓男	2018	森林の保健休養機能を高めるには-森林公園と別荘地の事例-	やまなし林業普及通信	55
長池卓男	2018	森林の希少種を保全するために	やまなし林業普及通信	56
西川浩己	2018	カラマツコンテナ苗の生産方法	やまなし林業普及通信	57
大地純平	2018	タブレット端末をもって森に行こう!	やまなし林業普及通信	58
大澤正嗣	2018	つちくらげ病の被害にご注意 一木の近くで焚き火をしない	やまなし林業普及通信	59
長池卓男	2018	森林域の別荘地におけるカラマツの管理と課題	関東森林研究	68
西川浩己	2018	コンテナボックスに採種木を植栽して配置する新たな採種圃造成技術の確立	公立林業試験研究機関 研究成果選集	15
長池卓男	2018	森林Landscape 復元に関する国際会議に参加して	森林科学	83
長池卓男	2018	スギ・ヒノキ人工林の針広混交林化を考える視点	森林技術	920
三枝 茂	2018	意匠性を高めた木製内壁材の開発	林業やまなし	219
西川浩己・馬目恭行	2018	コンテナボックスに採種木を植栽 種子の効率的生産方法を開発	現代林業	630
大澤正嗣	2018	大切な松を松くい虫から守ろう	林業普及情報活動システム化リーフレット	
長池卓男	2019	希少種を保全しながら森林を管理すること	林業やまなし	220
三枝 茂	2019	突如ぎの接合部を曲線化して意匠性を高めた木製内壁材の開発	公立林業試験研究機関 研究成果選集	16
國本俊雄(森林総研)・長池卓男・西川浩己 ほか	2019	ハツバの山梨県有林に設置したヤツガタケツヒ試験区におけるシカ被害を受けた林相の12年間の変化	森林総合研究所研究報告	18
長池卓男	2019	ブックス「森林科学シリーズ11 希森林と野生動物」	森林科学	86
高橋 誠(林木育種セ)・西川浩己ほか	2019	カラマツの種子をつけやすくする方法の開発-カラマツ苗木の安定供給に向けて-	森林総合研究所研究成果選集	令和元年版
西川浩己ほか	2019	種子生産能力の低下した採種圃における光環境の改善や現状剥皮による養分促進について	関中林試選優良種苗研究会成果集	
戸沢一宏	2019	ヌメシギタケの短木栽培	林業やまなし	221
小澤雅之	2019	針葉樹薪材の乾燥と品質	林業やまなし	222
長池卓男ほか	2019	シカをどうモニタリングするか	やまなし林業普及通信	60
戸沢一宏	2019	短木を利用したきのこ省力化栽培技術の確立	やまなし林業普及通信	61
西川浩己	2019	希少植物等の遺伝資源の増進 保存技術の確立	やまなし林業普及通信	62
三枝 茂	2019	山梨県産カラマツの地域別強度特性	やまなし林業普及通信	63
三枝 茂	2019	山梨県産スギおよびカラマツから製造した CLT の強度性能	やまなし林業普及通信	64
大地純平	2019	カメラ搭載架線用機器による効率の向上	やまなし林業普及通信	65
長池卓男・長谷川善平・田中 裕	2020	落葉広葉樹の森林を造るために	やまなし林業普及通信	66
小澤雅之	2020	チップの天然乾燥に挑む	やまなし林業普及通信	67
小澤雅之	2020	柱材の人工乾燥に伴う割れを考える	やまなし林業普及通信	68
武居正道	2020	令和2年度の木所研修を紹介します	やまなし林業普及通信	69
大澤正嗣	2020	県内にナラ枯れ被害が発生しました	林業やまなし	223

発表者名	年	題名	雑誌名・学会名等	号など
西川浩己	2020	光環境の改善によるカラマツ採種圃の普及促進について	林業やまなし	223
小峰正之	2020	自走式草刈機による下刈技術研修会を開催しました	林業やまなし	223
西川浩己	2020	希少植物等の遺伝資源の増殖・保存技術の開発	関中林試連情報	44
大澤正嗣	2020	油葉性害虫ヤノミガタチピタムシの生態と対策	森林防疫	69
西川浩己	2020	物理的制御によるカラマツ採種圃の着花・普及促進について	林業やまなし	224
長池卓男	2020	ニホンジカの影響と保護管理に関する試験研究	やまなし風友	49
長谷川喬平	2020	低コスト造林のため下刈りの必要回数を見直してみる	林業やまなし	225
長池卓男	2020	高標高域等の奥地森林におけるニホンジカの影響評価	林業普及情報活動システム化リーフレット	
長池卓男・長谷川喬平ほか	2020	山梨県における針葉樹人工林の針広混交林・広葉樹林化事例集		2020年6月版
長谷川喬平・田中 裕・大地純平	2021	下刈りコストを削減するには(カラマツ版)	やまなし林業普及通信	70
長谷川喬平・田中 裕・大地純平	2021	下刈りコストを削減するには(ヒノキ版)	やまなし林業普及通信	71
長池卓男・長谷川喬平	2021	複数の樹種が植栽された人工林の管理	やまなし林業普及通信	72
廣瀬 浩	2021	森林の水資源涵養機能を測る	やまなし林業普及通信	73
大地純平	2021	ヒノキコンテナ苗を活用するために	林業やまなし	226
小峰正之	2021	再造林コストを削減! クラッシュ刈り機の開発支援	林業やまなし	226
日下 度	2021	「低コスト造林技術研修」を開催しました	林業やまなし	227
三枝 茂	2021	丸太の強度と製材品の強度	林業やまなし	227
小澤雅之・伊原種伸・櫻田尚人・鈴木孝仁	2021	異なる乾燥条件下におけるスギ柱材の乾燥割れ	関東森林研究	72
小澤雅之	2021	バイオマス熱ボイラ用のチップ含水率について	関中林試連地域域材利用研究会成果報告書	
小澤雅之	2021	針葉樹材の薪利用について	関中林試連地域域材利用研究会成果報告書	
廣瀬 浩	2022	森林の水資源涵養機能を調べる	林業やまなし	228
長池卓男	2022	複数の樹種が植栽された人工林を管理するために	林業やまなし	229
戸沢一宏	2022	ハタケシジミの栽培(苗床での栽培方法)に関する研究経過	林業やまなし	230
日下 度	2022	架橋系系材技術における人材育成支援等の取組みについて	林業やまなし	230
長池卓男・長谷川喬平	2022	混交植栽人工林で過伐量はみられるか?—カラマツ・ヒノキ混交植栽人工林の事例	関東森林研究	73
長谷川喬平・田中 裕・大地純平・望月祥良	2023	下刈り省力試験地のその後	やまなし林業普及通信	74
長池卓男	2023	富士山の亜高山帯針葉樹林へのニホンジカの影響	やまなし林業普及通信	75
武居正道	2023	ラジコン草刈機で下刈りが楽になるか?	やまなし林業普及通信	76
小澤雅之	2023	カラマツ丸太とラミナの関係	林業やまなし	231
武居正道	2023	ウイングアシスト型機械(テザー)の見学体験会が開催されました	林業やまなし	231
大地純平	2023	山地帯での UAV を用いた荷物運搬 試験について	公立林業試験研究機関研究成果集	20
長池卓男	2023	スタケの枯死率が土壌浸食抑制に及ぼす影響	公立林業試験研究機関研究成果集	20
西川浩己	2023	効率的なカラマツさし木苗の育苗手法の開発	林業やまなし	232
戸沢一宏	2023	新たなさし木苗床栽培方法の確立 シロアラゲキクラゲとハタケシジミの栽培方法	林業やまなし	233
長池卓男	2023	外来種による人工林をどう考えるか?	林業やまなし	234
長池卓男	2023	山梨県の亜高山帯におけるニホンジカの影響	関中林試連森林の持つ環境保全機能の整備	
三枝 茂	2024	スギ大径丸太の簡易強度選別方法	やまなし林業普及通信	77
林 精太	2024	JR身延線のニホンジカ鉄道衝突事故	やまなし林業普及通信	78

発表者名	年	題名	雑誌名・学会名等	号など
西川浩己	2024	光環境の改善によるカラマツ採種圃の着果促進について	やまなし林業普及通信	79
大澤正嗣	2024	生態を利用した森林害虫の被害軽減手法の開発とその普及	森林技術	990
長池卓男	2024	ニホンジカの林業への最近の影響	やまなし親友	53
大澤正嗣	2024	マツノマダラカミキリの発生予察—山梨県での調査—	林業やまなし	235
大地純平	2024	RTK基準局設置によるGNSS測位精度向上の取り組み	林業やまなし	236
望月友裕	2024	林業安全作業指導 伐木等の業務に係る特別教育の実施について	林業やまなし	236
三枝 茂	2025	構造用製材の品質管理	林業やまなし	237
西川浩己・馬目恭行	2025	ヒノキ少花粉品種採種圃における機械抑制栽培の検討	間中林試速優良種苗の普及に向けた高品質化研究会 成果集	
小澤輝之・伊原隆伸	2025	カンノナガキイムシ被害木の有効利用に関する研究	公立林業試験研究機関 研究成果集	22
長谷川喬平	2025	ナラ枯れを媒介するカンノナガキイムシはどのくらいの樹高まで越冬できるか？	林業やまなし	238
長池卓男	2025	落葉広葉樹林の動き方	やまなし林業普及通信	80
廣瀬 満	2025	土砂流出を分析する	やまなし林業普及通信	81
林 隼大	2025	高標高域等の奥地森林におけるニホンジカの影響評価その2	林業普及情報活動システム化リーフレット	

## (5) 著書

発表者名	年	題名	雑誌名・学会名等	号など
長池卓男	2014	森林生態系の多様性維持における枯死木の役割と管理	樹木医学の基礎講座	樹木医学会編
長池卓男	2015	Restoration of Conifer Plantations in Japan: Perspectives for Stand and Landscape Management and for Enabling Social Participation	Restoration of Boreal and Temperate Forests, Second Edition	
長池卓男	2017	南アルプス高山帯でのシカの影響とその管理	日本のシカ	堀光一・飯島勇人編
大澤正嗣	2018	昆虫類(カワラゴミシ・ヒラタクワガタ・オクワガタ・ダイコクコガネ・オオチャイロハナムグリ・ツバカマルクビカミキリ・ヒゲナガゴマフカミキリ・トラフカミキリ・アカムネハナカミキリ・ヨツボシカミキリ)	2018山梨県レッドデータブック	
長池卓男	2018	ニホンジカが多い時代の林業とは	保持林業-木を伐りながら生き物を守る-	持澤宏昭・山浦悠一・栗山浩一編
大澤正嗣	2018	針葉樹人工林の湖に浮かぶ広葉樹	保持林業-木を伐りながら生き物を守る-	持澤宏昭・山浦悠一・栗山浩一編
長池卓男	2024	富士山をとりまく森林	図説 日本の森林-森・人・生き物の多様なかがわり-	日本森林学会(編)